

# 日本醫學史雜誌

第12卷 第1号

昭和40年12月20日発行

---

## 原 著

わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響(2)……阿知波五郎……(2)

「蘭学事始」福沢本の筆者……富田 正文……(55)

The Past 100 Years, A Century of

Japanese Medicine ……石原 明……(66)

会 告

例会記事……(58)

---

通 卷 第 1363 号

## 日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2~1  
順天堂大学医学部医学史学教授室内  
振替口座・東京15250番

## 動脈硬化治療剤

抗キニン剤

健保新採用

薬価基準1錠 ¥52:00

# アンヂニン

2,6-ピリジンジメタノール ビス(N-メチルカルバメート)

# ANGININ

アンヂニンは、動脈硬化を治すことが実験的に証明された、世界で初めての薬物で、粥状動脈硬化部より粥状物を吸収治療に向わせます。

また、抗キニン剤として強い抗炎症作用の他、ユニークかつ強力な出血阻止作用と血栓予防作用を一剤に具える独創的新製品です。

### 適応症

1. 次の疾患に伴う狭心症症状  
冠動脈硬化症、心筋硬塞、冠不全
2. リウマチ熱、慢性関節リウマチ
3. 脳血栓

### 包装

アンヂニン錠 1錠 250mg 20錠 100錠



製造発売元

万有製薬株式会社

## 第68回日本医史学会総会予告

下記の通り次期総会を開きますので、ふるって御参加下さい。また、同好の方々にもお誘いかけ願います。

**期日** 昭和41年5月14日(土) 15日(日)

**場所** 神奈川県歯科医師会館

横浜市中区6丁目国電桜木町駅下車徒歩2分

**会長** 石原明(横浜市立大学医学部講師)

### 特別講演

クスリのおいたち

東邦大学教授 清水藤太郎

生命体験の自覚と反省

日大教授 内山 孝一

### 会長講演

横浜医学史

横浜市立大講師

石原 明

今回は特別のプランとして第1日は午後2時開会、上記の特別講演と会長講演を公開講演会として一般に開放、医史学の啓蒙を行います。午後5時終了予定、午後6時より中華街において懇親会。

第2日は午前8時より午後5時まで一般研究発表にあてます。従来のように発表時間が短かいと意をつくせませんので、今回はこの点に留意するつもりです。次の要領により演題をつのります。

### 一般研究発表募集要領

1人1題20分以内、時間厳守。

約1000字の講演要旨に必ず英文タイトルとスライドの有無を明記。

昭和41年3月15日まで下記の総会事務局あてなるべく書留便で送付。

宛先 横浜市南区浦舟町2-33 横浜市立大学医学部医史学研究室

なお、雑誌も順調に刊行されるようになりますので、発表の際に原著がいただければ幸いです。

## 第二十回国際医史学会

第二十回国際医史学会に関する要項書がこの程学会に宛てて送られて来た。それによれば、つぎのとおりである。

開催日 一九六六年八月二十二—二十七日

場所 西ベルリン市

会長 ベルリン自由大学医史学教授

H. Goerke 博士

演題主要テーマ

- 1 ドイツと外国との間の医学上の関係
- 2 十八世紀と十九世紀における病理解剖学の歴史
- 3 古代医学

原著

わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響 (二)

(第六四回日本医史学会総会特別講演原著)

4 医学史の学問と研究の発展

5 医学と芸術

6 自由題

出題者は会費百マルクを添えて所定の用紙(本部にあり)に記入の上、十二月一日までに 1 Berlin 45, Auguststrasse 37 Generalsekretär H. Müller-Dietz 氏あてに申込むこと。

なお発表用語は英語、ドイツ語、フランス語に定められている。

阿知波五郎

## 第二章 各論

一、ヨーロッパからの影響前の外科——ヨーロッパからの影響期の判定

### (1) 「全瘡之書全部」について

日本外科のヨーロッパからの影響は果して、いつ頃から起ったかを定めることは至難の問題である。それにはザビエールの渡来以前の外科書で、しかも、その影響が多少、後の時代迄続くものを基準書として探りたい。

それには宗田本の「金瘡之書全部」（外題、金瘡療治抄）一冊、写本を探ることにした。巻頭に明暦三丁酉年（一六五七）八月十八日午刻ニ書とあり、巻末に「于時延文二年（一三五七）丙申六月七日書是元弘以来先朝吉野臨幸之際於四方郡類之中尋訪疵療治之術道令口伝秘薬之奥早爰南都四天王寺八幡等之合戦蒙疵ヲ之族已及数百人依令云調練也大切云名薬努療治効驗無双者也窮掌道久経之勤此薬ヲ書可云髓腦鈔疵明方者也于時応永二年（一三九五）乙亥潤七月日雖非其道玄為乃所望所焉写之右此本芳賀勝左衛門ヨリ相伝之不可外見者也、従宮若劔同上州伝之、従其同次良左衛門付伝之、従其草山宗右衛門付伝之」とある。楠正成編の①「金瘡療治抄」（一三三〇）があるという。本書はその系統のものか。

### ② 医学論

巻頭に医学論として、之を三つに分類し、六府より発するを内因病、五蔵より発するを外症、五蔵六府より発する傷病を府内外因病としている。「虚寒実熱ニカヨウテ何ニモ不依叟也」だから「熱シタレ共血垂リヌレバ（脱血）散シ（熱が散シ）、イヨイヨ虚ス故手肩ハ六月ニモ振也（悪感戦慄）」とし、内病と疵の関係を重視すべきであると説く。

### ③ 人神所在法

次に「宿曜師」の名が出て、「年月日之人神ノ在処ニ疵を負ヌレハ小疵ナレトモ死ト申人侍リ、其モサル叟ニテ侍レトモ、毎月十五日ハ人神遍身ニアレトモ手負皆不死、何ヲヤイワンヤ」そして個人差があるから注意せよと述べ、金瘡の禁忌事項として、「春三月ハ東頭<sup>ヒツガマツク</sup>ニ不寝」又「夏三月ハ南向ハ王相ノ方ニタイム也」さらに「月水ノ女人ニ不可見、懷妊ノ女、夫ニ不可見」、「猿ノ類ヲヨセス」このように *magia* なるものが現れる。

最後に「愚老、若年ヨリ以来、得名、医師廿八人ニ面受<sup>メシユ</sup>、口灸<sup>コウケツ</sup>シ、其後ヨリ人ノ物証ヲ記シ集メタル和漢ノ医書トモヲ披見シ、詮ヲリ、要ヲ抜テ記ス、是療摠故実トス奴<sup>ヌ</sup>と可秘<sup>ヒ</sup>と」要するに本書は室町期の和漢医書に現れた外科に関する綜説と見なしうる。

### ◎ 疵死生ヲ知叟

内容は第一、疵死生ヲ知叟以下五十条である。疵死生の予后判断には顔貌の視診を最重要視し、殊に眼についての観察を注意する。又死相を表している患者（「若シ心地損シアラク、ハタラキ、ムナモトサ、メキナントスル時節ニ呑合スレハ返ス叟アリ」）に「草山スケニ似タル、力山スケヨリモ、葉木ソキアリ、ソレヲ取テ一掬ハカリ、水ニスリタテ、汁ヲ絞テ能干シテ服ス可」とある。又、このように使用する薬として、生白薬と生青薬について記載がある。

### ④ 十善十悪ノ相

第二、十善十悪ノ相、予后判定の規準である。この第一、第二条の判定規準は比較的後世まで続くもので、ドイツ中世のブルンシュウイグ外科（後述）の記載中にも存するが、東西共に別々に予后判定を重視していると見るべきであろう（法医学的の目的にも重要という）。「維<sup>ツイ</sup>ヒ十善ノ相、備タリトモ手負子細アテ俄ニ血走ル叟アラハ不吉ト可思、是第一之不吉也、但、血ヲトメ灸ヲスヘシ、度々モナラハ必ス可死ト心得テ療治ヲ止テ退出也」この記事は当時の外科全般をうかがう恰好のものである。

### ◎ 止血法

第三は血ヲ留叟、これには薬方として前記の生白薬、生青薬、松緑、さらに民俗的な「足毛馬ノ尿ヲ以テ同馬ノクソヲ

十度斗シメホシシテ黒焼ニシ付ケル」等、さらに「経ノ木ヲ灰ニ焼テ粉ニシ」付ける。ここに黒薬が出てくる。このように薬方、灸、焼灼（唐蓬ト根チシャトヲ等分ニ合テツキテ餅ニ造リテ疵ニ押アテ其上ニカネヲ焼テ当ルナリ）、又止血と鎮痛に呪文（急々如律令ト三度唱テ）及びそれに類似の行為がある。プ氏の *Imaginativum*（後述）と共に、偶然東西類似する。

### ① 鎮痛法

第四条は「疵ノ苦痛ヲ止ヌ」である。天南星と石灰、五頭藥ゴトウヤク（多分に *arsenic* である）、「兎干トコホシ（ヲロシタル子也）ノ粉ヲ三錢湯ニテモ酒ニテモ可、可吞、女人ノ孕ミテ四、五月ニテヲロシタル子ヲ于テ用ユナリ」、独活粉一兩、天南星一兩人參粉二分。要するに *magic* な要素が介入している。

### ② その他の諸章

第五、疵ノ血醉留ルヌ。第六、腸出タルヲ入ヌ。第七、疵ノ血不垂ヲ垂スヌ。第八、筒に籠レル血ヲ出スヌ（胴ノ出血）第九、疵ノ口ヲ開ヌ。第十、疵ニ依テ物ノ狂成ルヌ。第十一、箭尻ノ籠タルヲ抜クヌ。（この中で特異な点は「大ナル磁石ニテ金ケノ分ヲスハスル吉也）。第十二、骨ヲ継ヌ（湯柳木ヲコシキニ入テムシテ其上ニ切タル方ノ切ヲアテ、二ノ骨ノ髓ノ中に麒麟血ヲケツリテカリクニ立テ是ヲツケテ虎ノ骨モ吉ナリ、此兩種ナクハ臍ノ緒ヲケツリテサス也」。この条に初めて針（刀）が出る。又、「手足切落タル」患者の処置の記載がある。第十三、筋ヲ継ヌ。第十四、頭ノ切タルヲ継ヌ（急々如律令ト百返、薬師ノ各号十二返、南北十二大願薬師如来ト可唱）。第十五、手負ノ命ヲヒカウルヌ。第十六手負口籠ヌ。第十七、疵ヲ不腫治方。第十八、表愈テ底ノ不愈疵ノヌ。第十九、疵ノ人中風脚氣ニ成ヲ治スルヌ。第二十、疵ノクサリテ朽行ヲ愈シ留ヌ。第二十一、疵ニ脚氣ノ寄タル治方。第二十二、射疵ホノ口狭ク底深ヲ治方。第二十三、疵ノ口内ヘマクリテ可死ヌ。第二十四、疵ノ深サ浅サキヲ知ヌ。第二十五、疵ニ子細有リテ一夜ノ間ニ頓ニ愈ヌ。第二十六、疵頓ニ肉ヲ生スルヌ。第二十七、乃不愈疵ヲ愈スヌ。第二十八、旧疵ノ発タルヌ。第二十九、疵ニ虫ノ相来ヌ。第三十、毒矢ニ当タルヌ（解毒薬、甘草ノ粉、葛粉、カチ栗ノ粉）。第三十一、陰ノ切ヲ継ヌ。第三十二、洗ユツルヌ（疵洗薬、湯柳、大ハコ、芭蕉、唐竹葉、

藤マツ、蓮葉、経ノ木、ソクツ)。第卅三、疵ヲ跡ナク愈ス。第卅四、疵ノアトクホキヲ如本成ス。第卅五、疵ノシ、ノ失タルヲ相来セシムル。第卅六、疵ノ口高愈タルヲ押ス。第卅七、疵ノ甘肉落ス。第卅八、頭ノ疵ノ跡ヨリ髪ヲマス。第卅九、頭ノ疵ニ腦ノ出タルヲ治ス。第四十、頭鳥帽子ノユイトノ左ノ上射レタル腰居テ右足ナヘタルヲ治ス。第四十一、曾利ノ疔（破傷風）。第四十二、疵ニヨリ喉ヘ血ノ出。第四十三、手負身内苦ク眼ノ色変スル治方。第四十四、疵葉ノ疔（唐ノ白葉、高麗ノ白葉、日本ノ白葉、諸家ノ秘葉）。第四十五、禁好物ノ大疔。第四十六、疵ニ可灸治様。第四十七、疵ヲ蒙テ必ス死可所ノ疔（左右ノ小耳ノ根、鳩ノ尾、心、心サキ章門、ヒチノカカリ、尻トフグリトノ間、項ノ上）。第四十八、爪ノ疔。第四十九、写葉ノ疔。第五十、河骨療治ノ疔。第五十一、射疵ニ血不垂ヲタラス。第五十二、疔ヨリ息出ヲ止。第五十三、疔ノ煎物ノ疔。第五十四、頭打破リナツキ出タルヲ治。第五十五、膏葉ノ疔（近江之國、湯次庄野村祕藏膏葉以下五種の膏葉の記載）。

### ⑩ 考 按

「金瘡之書全部」を採った理由。すでに古く「医心方」丹波介丹波宿彌康頼撰「進是書、実為円融帝永観二年(九八四年)十一月廿八日」は典拠を明らかにし、アカデミックな記述で論じた大著であり、その巻十五には主として癰疽を、巻十六には今日の悪性腫瘍と認むべき「悪核腫」の記載等、諸腫瘍を論じ、さらに巻第十七には潰瘍を、さらに巻第十八には金創の諸創を述べて、当時としては完膚ない論著である。殊に「全部」に現れた magic な要素も、「医綱本紀」聖徳太子撰の呪法の項に「医療無効者」に或は鬼神、或は天文陰陽祕府祭詞、或は験僧ノ呪縛等、以下主として「諸仏恨之而遣咒法」によって現れている。さらに「医心方」に至っては「人神所在法第八」及び「月令改所在法」等、当時の夫々合理的な解釈に発したものである。しかし、それが「金瘡之書全部」に現れるところは、このような合理論から離れて民間伝承のナイヴな Imaginativum な形に変しており、それが後世、鷹取流にもその形で現れることとなる。

すでに傷科、瘡腫の記載は古く「医綱本紀」にも現れるところである。そのみでなく、中国からの影響の中に、例えば麒麟竭一つにしても「葉経太素」の中に「本出南蛮」とあって、このように諸源流を、さらに厳密に検討し、南方的の



もの及びヨーロッパ的のもの中国を介して伝来した点を追求すべきである。著者はその能力に欠けるので、この点を意識的に廻避して、日本外科が直接ヨーロッパからの影響を受けたもののみを採ることとした。

このように「金瘡之書全部」は、その時代の実際に則したものであり、後世、南蛮系の諸書が、著しく、この線に沿い、夫々俗書に近い実践書であって、それとの比較に、この「全書」を採るのを最も適当だとしたからである。

### 引用文献

① 富士川游「日本外科史」三十七頁

### (2) ヨーロッパ医学からの影響のはじめ

ヨーロッパ的な外科の影響のはじめを決めることは困難である。

有名なピントの「巡廻記」に載っている大内義長に対する銃創治療を、文献に現れた、わが国最初のヨーロッパ風の外科手術だとの説がある。その推定は天文十三、四年頃、つまり一五四四、五年頃である。

大体、天文十一年——天正十五年を「ポルトガル私船による諸侯との貿易時代」とする学者がある。ポルトガル船の種子島に漂着したのは天文十二年である(一五四二年説もある)。その前年一五四二年頃にはすでにポルトガル船が来ておる。

当時のバードレ、ニコラウの書翰(天文十七年(一五四八)にも、薩隅の諸港と支那、さらにポルトガル商船の往復がしげしげ行れ、鹿児島湾や大隅薩摩半島の港には支那のチャンク船や、ポルガル商船のナウの帆船が、いつも碇泊していたという。

天文十八年 五月頃にはザビエーの渡来以前にも拘らず、すでに悪魔祓いに十字の印をつける風習があったという。<sup>②</sup>  
一五四九<sup>①</sup> 賀賀多の渡来は、その頃で、天文年間には巷間で賀賀多遊びが行れていたという。

以上の諸事実から判断して、ザビーの渡来(天文十八年 一五四九)以前にヨーロッパ的な薬方なり薬剤の一部が伝来したことは疑い

ない。

ルイス・デ・アルメイダの医療活動は余りに有名であるが、<sup>⑤</sup>弘治元年にイルマン、アントニオ、ディアスはマラッカを出發して日本に向う際、多量の医薬、処方並に外科入門書を携行したという。

⑧ 当時の外科書を年代順に記載し、何れがヨーロッパ的影響書かを検討して見たい。

- (1) 康正二年  
一四五六  
「外科書」<sup>写本</sup>二冊（北長下医書とあり）（富士川本）。
- (2) 明懸四年  
一四九五  
「鬼法」<sup>写本</sup>富小路範実著一冊（富士川本）。
- (3) 天文十五年  
一五四六  
「靈蘭集」<sup>写本</sup>細川勝元著一冊（富士川本）。
- (4) 弘治二年  
一五五六  
「外科新明集」<sup>写本</sup>僧良善著一冊（富士川本）。
- (5) 永祿六年  
一五六三  
「家伝退誉聚驗方」<sup>写本</sup>久志本常光著一冊（富士川本）。
- (6) 天正七年  
一五七九  
「金瘡治事」<sup>写本</sup>「金瘡一流療法」<sup>写本</sup>曾根祐磧著（中沢氏秘方筌十一冊中の第五編）一冊及五冊（富士川本）。
- (7) 天正九年  
一五八一  
「外療新明集」<sup>写本</sup>「外療經驗方」<sup>写本</sup>鷹取秀次著上中上三冊（著者蔵）。
- (8) 天正十年  
一五八二  
「外科捷徑方」<sup>写本</sup>慶祐法眼著一冊（富士川本）。
- (9) 天正十三年  
一五八五  
「換骨祕録」<sup>写本</sup>吉益半笑著一冊（富士川本）。
- (10) 天正十三年  
一五八五  
「換骨抄」<sup>写本</sup>吉益半笑著二冊（富士川本）。
- (9)(10)の異本七部あり。
- (11) 年代不明 「中条流金瘡」<sup>写本</sup>一冊（著者蔵）。

以上のように十一部がヨーロッパ的影響について対照となる本である。

(1)の「北長下医書」と外題のある「外科伝」は年代からいって対照の外にあるものといつてよい。

しかし、本書の特記すべき点は針(刀)の立てようを詳細に記述し、特に瘰癧において爪除去法に特徴がある。即ち爪の切りようの図示まである。これは後世、鷹取流及び山本玄仙の「万外集要」にも採られてあり、その影響が大きい。癰の項に、「悉針ヲスヘシ」とある。これは膏藥外科時代前において、観血手術のみに頼っている点、著しく積極的で、意味深い。

又この書は前述の「金瘡之書全部」がヨーロッパ外科の影響を受けない外傷外科の書であるのに対し、癰疽を対照とした外科の代表書といつてよく、乳癌の記載はなく、薬劑も主として和漢両様のものを使用している。但し、縫合の記事はない。

(2)の「鬼法」は特記すべき記事はない。

(3)の「靈蘭集」は從四位下右京大夫源勝元著で大和守片岡晴親の校である。卷末に「天文丙午冬十一月朔、大和守片岡晴親謹識」とあって、二種の写本がある。本朝医考に「管領細川勝元政務之暇、嗜医術、略閱歷代之方書、拔其華、提其要、誌以倭字、聚成一書冊、名曰靈蘭集」。又本邦医家古籍考に「靈蘭集細川勝元撰、仁和寺書目ニ出タリ。『只書名ヲ伝フルノミニテ其有無不詳』とある。書中、観血記事はないが、破傷風患者の症例の記載があり、「全部」や「医学書(伝)」と共に日本的なものの基準の参考となりうる。

薬劑の一つ二つにヨーロッパ的な記載があったとしても、直ぐこれを採るわけには行かない。前述基準書と比較して、鷹取流と吉益半笑(咲)齊のものには明らかに多くのヨーロッパ的な影響を認めうる最初の外科書と断定したい。

曾根祐積家伝の「金瘡一流療治」は全体に、その後が続く鷹取流に酷似しているので、一括鷹取流とすべきである。その七に「問薬ニテ生死ヲ知ル」、生死の予后判定に問薬(清夏散を使用、七才未滿の童子の尿を服用せしめ、その吐か不吐を以て判定とする、後世「外科訓蒐凶彙」の該当項にもある)。を使用するのは特異である。すでに鉄砲伝来後のものであるので、その二十三には「鉄砲の玉拔様」がある。そして二十七の「手を切落シタルを接様」二十八の「指ヲ切落シ

タルヲ接様」のように、金瘡に具体的な記載が多い。とくに三十二の「腹腸出タルヲ入様」の章に「臍ヨリ上カラ腸ノ出タル疵ハ瘻、下ハ不瘻」とあるのは観察が細く、実際的である。創に青木葉を使用し、或は牛蒡の葉を用ふるなど、鷹取流と同じであって、当時の粗朴な外傷創の処置がうかがいうる。鷹取流にもある *Imaginatum* な章（九）に、「時の人神、年の人神ヲ知」として「医心方」に拠っている。全章五十九、何れも実際的で、縫合、切開、血管損傷の処置、破傷風の予防（破傷風トハ「ソリ」ト云也。尤ソリカヘル病ナリ。是ヲ角弓反張ト云。此病ハ疵ノロヨリ風入テ、或ハ悪感シ、或ハ熱シ、筋ツリ、急ニ背ヘソリカヘル事ナリ。是一大事也、早治スヘシト云）、脳損傷、骨折が主な記載項目で南蛮流と較べ、外科技術の上のみからいえば大きい見劣りはなく、当時としては程度が高い。

(i) 鷹取流外科書の検討

当時最もよく行れたものと想像される。

- (1) 「外療細漚」三卷・一冊 慶長十一年（著者蔵）
- (2) 「外療細漚」三冊本と一冊本とあり、慶長十五年識語 一六一〇六（富士川本）
- (3) 「外療新明集」上、中、下、一冊、寛文八年 一六六八（著者蔵）
- (4) 「外療經驗方」上、中、下・一冊・寛文八年 一六六八（富士川本）
- (5) 同右、明和九年（富士川本）
- (6) 「金瘡一流秘伝抄」写本、一冊、寛永二年（一六二六）（著者蔵）  
鶴原久右衛門尉撰
- (7) 「外科方彙」写本、一冊・、鷹取養巴（著者蔵）

著者の目にとまったものだけでも、七部ある。富士川本の「外療新明集」の表紙裏に、富士川游氏自筆と思われる書込みがある。「私接スルニ外療經驗方ハ後人ガ恣ニ改竄セルモノナラン、其字体ノ他ノ字体ニ類セザルニテ推測スルニ、此書、再版ノトキ書舖ノ猥リニ改刻セシモノカ」と記してある。「外療經驗方」のみに現れた呪文や、金瘡座敷の作りよう

に見える Hæmic 的なものも、その為に後人の追加したものと見るべきようである。「金瘡一流秘伝抄」は巻尾に「右者備前国鷹取甚右衛門入道宗可一流之秘伝、若年ヨリ九十四歳ノ一代仕覚処之得業、拙者不殘令相伝、我亦仕覚処ヲ〇方此書ニ留置者也。為私之法雖無他伝更奇連々御所望ニ不及是非如此候条努々他見有間敷者也。于時寛永三年二月吉日、鶴原久右衛門尉」とあって、全篇五十六条、その中で七の「時之人神同年之人神ヲ智様之更」は「全書」と同じく「医心方」的であり、十三の「手負之座敷ヲ拵様之更」も「外療經驗方」などに出てくる、有名な呪文「目ノ玉ノ太郎ノ御子ニ我シカラハタコンホロンソワカト唱フベキナリ」(二十七丁表)などは、確かに後人の作と見るべきであらう。

(i) 鷹取流の特徴

(イ) 初めて多くの膏葉の使用。万安膏(松脂、仙人掌)、仏下膏(松脂、荷葉、白物)、神仙膏(松脂、燕糞、玄蚕白物)、太全膏(松脂、鼠屎、白物)、石林膏(楸シ若枝葉)、辰干膏(脂、梔子、黄柏、丹礬、白物、朱砂)、万金膏(脂、仙人掌、白物)、太乙膏(白芷、川芎、大黄、ノ椰、当皈、黄芩、荷集、重葉、仙人掌)、吸疾膏(脂、仙人掌、白物)、保命膏(脂、阿仙葉、藤胞、乳香、蓖麻子、川芎、白芷、檳榔、防風、荆芥、白檀)・王瑜膏(脂、没藥、乳香、白物)その他、仙人掌膏、金仙膏、吸乙膏、一目膏、紫金膏、千仁膏、万勝膏、膿失膏、吸六膏、光明膏、万用膏、大愈膏、惣勝丹、清金丹、金竜膏、疵膏葉、方用膏、用定膏、安平丹、專用膏、以上のように三十二方の膏葉がある。すでに、この時代に膏葉外科時代に移行している。

(ロ) 油葉、従来の和漢の外科には現われない。「外療細漚」下、十七丁裏に「是ハ南蛮人用ヒル葉ナリ」といっている通りである。「ヤシヲノ油」がそれである。

・「外療細漚」の巻中に「丹毒之見様」がある。「草ト云ハ丹毒ヲ云フ」として赤草、走草、黒草、燃草、切草、穴草、浮草、髮草、齒草、胸草、乳草、股草、水草、脚草、以上現在の丹毒を含め、すべての皮下蜂窩織炎及び現在の皮膚病をも含め、表在性の疾患を記述している。乳草の中には「乳核アリテ堅ク成リテ塞クフルイ付テ醒ルナリ」乳腺炎と共に乳癌をも含めてる。

(一) 其の他の薬方

諸家の方の集成、膚守（平家方ニ八幡ノ方）薄色（源氏方ニ用ヒタル愈薬）、白薬（板倉源左衛門尉方）、琥珀散（神保宗左衛方）、三国一（蔵貫豊後守方）、流薬（轡田左京方）、弘白散（丹都流方）、二聖散（板坂流方）、安平散（大野丹後守方）、九色散（曾我流）、黄蘗湯（長屋流方）、六味薬、等、何れも創の愈薬であつて、中には檳榔、等が入っている。

(丙) 外科的処置 外科的処置に頭疵、腸ヲ入事、欠唇、骨ヲ続事等の記載があり、創に洗薬を使用する。その中には杉ノ葉以下四十二種の諸薬をあげている。何れも煎剂とする。中に塩があつて、「肉ヲクサラカサヌ物ナルニ依テ洗ヒ薬ニハ必ス不迦ナリ」とする。幾分制腐に役立ち合理的である。前述の「金瘡一流秘伝抄」の三十三には疵ノ縫様之夏がある。その中で特異なのは縫合の方法の一つとして「布ヲタツテ膏薬ヲ付而、疵ノ両之脇ニ張付而其中へ糸針ヲトヲシテカケ縫ニヌウ物也」をあげている。別に蛭の使用もあるが、灸と共にその慣用は古く、全くヨーロッパ的のものとは別である。火針の記載、これとても土佐光信筆の「病草紙」にも見られるところで、ヨーロッパの烙鉄とは源流を異にする。頭疵、腸ヲ入事、欠唇にはヨーロッパ的のものを感ずる。

「外療新明集」は卷末に天正九年一五八一の記載があるので、初版はこの年と見るべく、明和九年一七七二年版のものとの間には百九十年の長い期間がある。この約二百年に亘る長期間鷹取流が行れた理由は、南蛮流とは別に、使用薬剤の民間伝承の強さと、和漢洋折衷の利点であろう。何れにしても鷹取流には多くの南蛮流の影響が見られることには誤りが無い。

(ii) 吉益流外科

次に問題になるのは吉益半笑（咲）齊の本である。これにも多くの異本がある。

(1) 「換骨秘録」 写本、吉益半咲齊撰 一冊、天正十三年（一五八五）曲直瀬玄朔序（富士川本）

(2) 「換骨抄」 写本（折本）吉益彈正入花押、吉益小伝次殿（富士川本） 一冊、慶長拾三甲戌（一六〇八）

(3) 「換骨抄」 吉松半咲齊口伝、吉益掃部大甫、半笑花押、吉益左匠助殿（富士川本） 写本一冊、慶長十五年正月三日（一六一〇）

(4) 「換骨秘録」 写本、吉益主馬亮、干時寛永八年辛未仲夏上澣、匡明花押、陽川庄三郎殿 (富士川本) 一冊、天正十三年(一五八五) 曲直瀬玄朔序

(5) 「換骨抄」 写本(折本) 慶安元年孟春日、匡明花押、小堀四兵衛殿 (富士川本) 一冊 正保三年(一六四六) 季春

(6) 「換骨抄」 写本、吉益主馬助匡明 一冊 寛文十三年(一六七三) 八月 (富士川本)

(7) 「換骨抄」 写本 (富士川本) 一冊

以上七部のうち、(1)の「換骨秘録」が会も詳細な記述であるので、これを底本とし、他の六部を参考として述べる。

(4)の「換骨秘録」の洛下啓迪院直瀬(曲直瀬)玄朔の序には「河南吉益氏有一医工、其名半咲、云善治金瘡、嘗本朝有外科之名世者、不論遠近而必摩踵来学数家蘊奥合為一家之方書、目謂換骨秘録灸、蓋聞孔子之所慎、厨戰疾、信哉其言也、古来干才之道、盛行、枉死之者不可勝計、半咲業外科之後告有杖打刃傷等之者、不限貴賤、即住而救是、無不減、減可謂百發百中者歟、以古而比是則、華佗剝腸剖臆刮骨統筋、神奇寧無踰於此、平公丁日就予請聞診候之奧儀藥性之至理不克、辭讓粗葦素難及明医論說以応其責、然後吉益家之一流大成者也、庶幾令斯書広伝天下普保万民之秘命矣」(天正拾參年歲次乙酉冬日南至)、本書の由来と吉益半咲について述べている。

(1)の「換骨秘録」には「専武道之家用之」といい、又疵は從來唱えられたように臟腑が感染症発呈の素因でなく、すべての健康人も百病のないものではなく、それが故に熱気が入って感染症の癰や疔となる。従って全身の状態を常に考慮に入るべきを説く。さらに本書には前記の玄朔の序と異なり、負傷者の一般状態、とくに局処並びに全身の安静(「寄懸干物安座宜用安楽湯、或動体無手足屈伸、專慎風寒七情」と全身の養生の必要性を強調している。

本文には「五善之証」と「必死之証」とを述べている。創傷の予後判家である。とくに「手負脉」を重要視している。特に観血手術の記載はないが「腸出法」の項には縫合の記事(「……以青油和之、塗腸入之而用細布、施膏疵兩端貼之以糸布端縫合隨癢、宜縫細之矣」)があり、膏薬と油薬を使っている。とくに膏薬法の一項がある。

止血には松緑、麒麟血などを主剤とするものを創に撒布し、又、鷹取流にも見られた「源氏之薄色止血方」を使っている。

る。

創の処置は「酢薬之法」があるが、むしろ「染紙之法」と「洗薬之法」「湯治之法」が主体である。「染紙之法」は「椿葉五十片、石用大釜盛水以慢之、煎為膏、去盪、用汁、以厚紙染之、○乾、多少疵不拘護之」である。「洗薬之法」は鷹取流と大差ない。「湯治之法」は創を洗薬で洗う。洗薬は何れも熱沸してあり、器械的に汚穢物を洗う効がある。感染予防である。

以上のように、吉益流は全身状態の保持を第一とし、感染予防に洗薬を使用、陳旧創に油乃至膏薬を使用する。鷹取流に次で膏薬、油の使用、腹部損傷等にヨーロッパ的のものを認める。

以上を総合すると、ヨーロッパ的影響をはっきり認めうるのは鷹取、吉益の両外科期からであることを認めうる。

#### 引用文献

- ① 外山卯三郎「南蛮学考」一二〇頁
- ② 茂野幽考「日南切支丹史」二七頁
- ③ 同書、五一頁
- ④ 「新村出選集」第一巻、八二三頁
- ⑤ 外山卯三郎「きりしたん文化史」一三三頁

## 二 スペイン、ポルトガルからの影響

### (1) 南蛮、紅毛両流外科の境界——忠庵系外科書を中心として

Christovão Pereira (こと沢野忠庵(前出))については、富士川<sup>①</sup>、新村<sup>②</sup>、関場<sup>③</sup>、古賀<sup>④</sup>、海老沢<sup>⑤</sup>、大鳥<sup>⑥</sup>、石原氏らによって報告され、その近代科学史上の意義については⑧海老沢有道教授の業績によって明らかにされた。



四体液説とヨーロッパ的解剖学の概説の紹介が果して忠庵のみによってなされたかは疑わしいが、ともかく、その紹介と、その外科において動脈瘤、その他、神経損傷、脊髄損傷の記載があつて、当時、並列される栗崎流外科の実用的に徹しているのと較べて、ヨーロッパ的医学思想の片鱗がもたれている。これは忠庵がヨーロッパ人であつた事実に向う性格のものとするべきであらう。

浪華陰舎著の「阿蘭陀外科指南」元禄九年 一六九六（著者蔵）解剖記事の「心ノ藏ハ胸ノ中ニアリ。耳ノ様ナル物ニツアリ。是ハ心ノ藏ヲ清メル風ヲ受取役ナリ。心ノ藏ノ袋ニソ。此袋ハ肝ノ藏ヨリ心ノ藏ヘ渡ス。血ヲウケトリ能血ニナシ、サテ左ノ方ノ袋ヨリ筋アリテ血を總身ヘワタス也」（同書、経絡ノ章、十三丁表）。これは William Harvey, 1578—1657 の血液循環論、*Excitatio anatomica de motu cordis et sanguinis in animalibus*, 1628 より以前のもの、即ちガレヌスのものである。

左右心室中隔の通過性を認めている。この説がよし、「前ベザリウス、前ハーヴェイ説」に拠っているとしてみても、ヨーロッパ的の心臓の解剖生理のわが国への紹介としては劃期的な記事であつて、山脇東洋の有名な、日本最初の解剖宝暦四年 一七五四年より半世紀前の事実であるからである。そして、この事実から恐らく南蛮系と判断してよいのである。（坪井信道訳の「蒲爾花歌、万病治準」第九冊、第五百七十三章のスウィーデン斯威甸註はハーヴェイの名と共に、その血液循環論の紹介が二丁に亘つて記載されてある。即ちライデン学統は時代からいって当然であるが、ハーヴェイの「血液循環論」によつてゐる。

忠庵の唯一の資料とされる「南蛮流外科秘伝」（富士川本、写本）（上、中、下三卷二冊）の四体液説もさらに「熱寒風痰見様」の記事をもこれに当てはめれば、大体、以上の諸事実は忠庵のみから紹介か否かは別として忠庵が紹介した。

このようなヨーロッパ的な医学論は、よし簡單粗朴なものであるにしても、同じ南蛮系の栗崎系写本類には発見できない事実と併せ考へて、すでに海老沢教授の指摘されたように異質なものである。このように眞の忠庵系ものは、他の南蛮系（栗崎流など）と體質的に異つてゐることを前提とすべきであらう。

南蛮、紅毛両流外科の境界については学説区々で、またその決定を見ない。ただ忠庵系外科を調べると、十五世紀末ドイツでよく行れた、有名な *Das Buch der Chirurgia, Hantwischung der Wundarzny von Hieroimo Brunschwig, Strassburg,*

1 Johann Gruninger, 1497 (シゲリスト再刻版による、著者蔵)の内容と略一致する。即ち、十五世紀末を中心とし、せいぜい十六世紀前半迄にヨーロッパで行れた外科と同一内容である。

すでに諸家によって記載されたように、忠庵が再々蘭館に出入し、蘭館医師の治療を見学した点も見逃されない。とくに一六四八年七月十二日の蘭館日記には「背教師ジョアン(忠庵)が奉行所の上士二人と来館、外科医にいろいろの菓草の効能と諸病の治療」を訊ねた記事があり、又同月二十六日にも同じく見学をしている。忠庵はこのように蘭館に出入し、オランダ医学の吸収につとめたのであるから、忠庵系の医学には、すでに、オランダ系の治療法なり、処方その他が混在していることは当然の事実であろう。

前述の「南蛮流外科秘伝」は、すでに富士川、関場、海老沢諸氏の採られたもので、現在忠庵系外科書の遺された資料が殆んどないので、今次の調査に、この本を底本とした。その内容については、すでに報告されているので、省略するが、外容は漢方化されながら、ヨーロッパ的のものを多く残していることを再確認した。

次に前述の「阿蘭陀外科指南」は、種々の点で従来問題にされてきた。果して忠庵系なりやが問題である。そのためには、その序文中に「頃一友得於全書示予」とあって、この本が「全書」なる今日、未知の本によっていることを明示している点の解決が第一である。この「全書」がいかなる本か不明であったが、著者の調査によれば、「阿蘭陀外科全書」(五卷 山村宗雪著)であると判断される。

富士川本に山村宗雪著、大町宗卜撰「阿蘭陀外科全書」元禄九年(富士川本)二巻がある。今その序を見ると、

「夫医者以治病為責也、而今人不辨乎治不治而一拘家流、不能知応其変、故誤治者甚多矣、往時有山村宗雪、先生者肥州長崎人也、嘗日從於紅毛夷人、以学外科、尽窮其奥義、京師復搜索諸家之秘臨機變之術、真不精詳周密、是以亦有年矣、予師事先生、親炙日久、且授以書數卷、因病而敷業則間有効驗、雖然其文駁雜而諸者憾焉、故芟繁補略而以為一編、欲学此術者能曉此書焉、則庶手濟人之一耳、云爾、

元禄丙子仲秋日

大町宗卜 謹識

即ち、このように富士川本の「阿蘭陀外科全書」(二巻)は山本宗雪の原著で、それを門人の大町宗トが改訂して成ったものであることがわかる。

即ち「阿蘭陀外科指南」の序には、底本とした「全書」は五巻であることが明記してある。従って山村宗雪の「全書」五巻がこれに該当する。宗雪はこれを改訂して二巻本としたものと判断される。富士川本の「全書」(二巻本)は「指南」と同年のものであるが、「往時<sup>有</sup>山村宗雪」とあることが、二巻でない、そのもとであるこの五巻本「全書」が「指南」の底本としての条件に合致する。

又、中村宗興の「紅毛秘伝外科療治集」五巻、一冊、<sup>貞享元年</sup>一六八四年(富士川本)の序にある「瘍医宗君所著」とある。これも、山村宗雪の前記の本ではないかと想像される。この「紅毛秘伝外科療治集」は<sup>貞享二年</sup>一六四四年で、「指南」より十二年古い。従ってその「宗君」は富士川本の「全書」(二巻・)の大町宗トでないことも事実である。従って、これも当然「全書」(五巻本)の山村宗雪がこれにも相当するのではないかと判断される。

このように、大体、山村宗雪の「全書」(五巻本)が少くとも「指南」の底本であろう。しかし、著者はこの五巻本「全書」は未見であるので、以下の調査には前記の富士川本の山村宗雪著、大町宗雪改訂の「阿蘭陀外科全書」二巻をこれに代える。その内容は次の表のようである。(表第五参照)

今、その内容を調査するに、関巻して、第一に「阿蘭陀口和解」がある。これは「指南」の序文に「示予開巻葉名俚語差尽」の記事に一致する。このような和解集は当時、多く世に行れていたが、著者の目にとまった五部の当時の同種の本を調べても、葉名と俚語と共々記載されたものは他にはない。

この「全書」(二巻本)の「阿蘭陀口和解」は一、身体以下表のあるように、十三項目からなっている。そして、その内容は、大体オランダ語の和解ではあるが、その中にポルトガル語が混在している。例えば一の「身体之類」でも、よく引用される神経のネルホ *nervo* や血液のサンギ *sangue* や鼻のナリス *naris* や足のベイペ、髪のカベイリヨ *cabelo* などポルトガル語である。しかし、十三の「数量の言」はすべてオランダ語である。これは一例であるが、医学関係用語

## 阿蘭陀外科全書目録 (富士川本) (表第五)

## 卷一

## ○阿蘭陀口和解一

- 一、身体 二、五臟 三、六腑 四、病名 五、器類 六、草類 七、木類  
八、鳥獸 九、虫類 十、金石 十一、酒名 十二、雜 十三、數量

## ○阿蘭陀人治法二

- 一、病原論 二、二經論 三、熱瘡 四、冷瘡 五、風腫 六、癰  
七、疽 八、疔瘡、九、癩痺 十、瘰癧 十一、経腫瘡 十二、小瘡  
十三、水腫瘡 十四、囊腫 十五、マレンコレヤトン六瘡  
十六、カレコロウト云瘡 十七、類疔 十八、下疳瘡、十九、重舌  
二十、フレイマト云瘡

## 卷二

- 一、金創治法 二、同縫糸針附キリトギスノ油 三、同洗薬方 四、頭金瘡  
五、治筋骨断縫方 六、血止之方凡二方 七、治金瘡血不止疼痛 八、金瘡  
膏藥凡九方 九、同二十四時愈シノ方凡二方 十、頭金瘡付薬 十一、矢鉄  
鉋疵治法 十二、兎唇治法附縫法洗薬 十三、同付薬凡二方 十四、折傷骨  
ツギ 十五、阿蘭陀治法総論

## ○阿蘭陀製薬功能目録

- 一、アキスタラキトムトウリコム下シ薬也凡二方 二、テリアカ同方 三、  
バルサモ同 四、ムカキヌン 五、ミイラ 六、ウンコウル 七、ヘイシム  
レイル 八、ヘイトロハサラ 九、犀角附瓜歯皮 十、コキイニヨ 十一、  
シタラフウテ 十二、ギタラブ、十三、ハウテチャンハン 十四、ハウテメ  
ルタ 十五、ハウテモウルス 十六、ハウテコウフラ 十七、ミリンカ附腹  
中ノ虫ノ凶 十八、スランガホウト 十九、ドロツハン 二十、ソツヒリマ  
アト焼法 二十一、ベレシビタル焼法 二十二、鉛焼法 二十三、鼻タハコ

目録終

の中にはポルトガル語が残され、「指南」の所謂「俚語」に該当するものは大体オランダ語である。

次に「全書」（二巻本）に現われる記事は「阿蘭陀人治法」である。それは一、病原論以下表にある二十章である。そのうち、二、二經論と十八、下疳瘡以下の三章、計四章が「指南」に欠除しているが、他の十章はすべて「指南」の「外科総論」中の十七項目の中に記載されている。

次に「指南」の第二巻の「金瘡之部」は全く忠庵と同一内容である。然らば忠庵の「金瘡之部」とはいかなるものかといえ、創を焼酒で洗い、縫合している。その縫合法は焼酒で洗って後、玉子の白味を塗り縫合し、繃帯交換は朝、晩各一回としている。抜糸は五日乃至七日とし、時に応じて間を置いて抜糸する。抜糸後は黄味、椰子油を塗布する。腹部創は椰子油を使用し、とくに糞臭に注意せしめている。突疔深疔には深疔油、豚肉油、松脂、人油を使う。発膿瘡にはコヨリをさし、仙人掌のモミ汁、松脂、椰子油、白丹化粉を搜入する。筋渡、筋肉の損傷は花之油を塗布する。骨折には別膏藥（松膏を主藥）、骨継の藥として蠟、松脂、ネブ木の脂、ウラン等を使用する。止血事、髓筋疔之事（神經損傷）、頭疔之事、頭薄葉有疔驗之事、髓薄皮薄葉有膿驗之事、髓効驗之事、頭疔善惡驗之事、頭疔養生之事、胸疔之事、経絡の諸項がある。髓筋はネルボ *nervo* であり、これは従来の方には見出しえない記事である。

この忠庵の「金瘡之部」は、当時よく行れたものと想像され、前掲の「指南」、「療治集」の各金瘡部は夫々全く一致している。そして勿論、その底本と推測される「全書」（二巻本）とも一致する。

即ち、「金瘡の部」は前掲の四書共、全く同一内容で明らかに忠庵系だと断定できる。

次に藥物療法、殊に当時の外科療法を代表できる膏藥である。

忠庵の「秘伝」には巻之中に膏藥二十八方、巻之下に金瘡の藥物療法十一方が記載されている。これと前掲の三書とを比較すると、宗璵の「療治集」所載二十五方中、主藥が忠庵と一致するもの八方であって、処方の内容が多少相違するのは五方で、残りの十二方は「秘伝」には全くないものである。

これに反して「指南」の全処方、五十方のうちカスバルと一致するもの十五方、そしてアンスヨレアンの二十八方中の

二十二方も記載されている。

薬物療法は、この点だけからいえば、むしろオランダ系の混在が多い。

「全書」(二巻本)には第二冊に前記「金瘡の部」の他に「阿蘭陀製薬功能目録」があつて、「金瘡の部」が忠庵系であるのに反し、全くオランダ系である。

山本玄仙の「万外集要」(南蛮流外科心伝) 元和五年 一六九一(著者感)は序に「和南両道」と明記してあるが、和は「北長下

医書」康正二年 一四五六から採つたものが多く、殊に、その十九章、針の叟は「北長下医書」と同一である。

山脇道円重顕著「外科良方」(阿蘭陀流外科書) 寛文九年四冊 一六六九(著者感)は全般に忠庵系の要素を発見し難く、「乳岩

(スヘイインテホルス)」の記事は南蛮系には見出しがたいもので、オランダ系と見るのが正しいし、「鼻茸」の項に鉛子で「鼻茸ノ根ヲハサミ」それを「ハサミノ本ヲ糸ニテ能シメククリヲキ、一日ニ二、三度モ其ハサミノネヂ、マハシヲケバ」除去できるという記事(「外科良方」巻之三、四丁)は片倉玄周の有名な鼻茸の切除術を暗示せしめる記事であつてこれもオランダ系と認むべきであろう。何れにしても「万外集要」は年代的について忠庵の医学活動前のもので、考える余地はないが、「外科良方」は忠庵前掲四書と比較できない内容を持ち、すでにオランダ系の混在さえも疑わしめる内容があり、「万外集要」の混在も多い。

要するに、「指南」、「療治集」は勿論、「全書」も南蛮、阿蘭陀両系の移行期のもので、その混在のまぬがれ難い事実を現わしている。最近宗田一氏も薬学的の立場から、「南蛮医学から蘭方医学へ」を検討され、著者と同じ結論を出された。

大島蘭三郎氏によれば蘭館日誌、一六五二年五月廿四日の項に、井上筑後守が発した解剖書の注文書に、とくにポルトガル語のものを求めていた(ポルトガル語が全く消えたのは天明のはじめ頃とする学者もある)。両流の区別は漸を追つてオランダ系に移行したものと考へたい。

「阿蘭陀外科全書」の著者、山村宗雪は従来の医史学書に現われない医人であるが、「崎陽先民伝」に「業医、叙法橋位」

「紅毛秘伝外科療治集」(表第六)  
(記載症例集)

記載総症例数86例 (内金瘡部記載症例5例)

腫	物	29	
癰		11	
疔	瘡 及	4	
風	瘡	1	
石	腫	2	
疽	疽	1	
瘰		1	
癧	瘡	1	
風	毒	1	
齒		1	
癰		3	
痔		1	
脫		1	
奪	命	1	
節	毒	1	
乳		1	
大	舌 (舌癰)	1	
欠		1	
六		1	
胞	ツ	1	
鼠	不	1	
便	咬	1	
耳		1	
胎	毒	2	
奪		2	
痛		1	
鼻	腐	1	
筋	瘰	1	
皮	下蜂窩織炎?	2	
骨	髓 炎?	1	
赤	陽	1	
股	關節頸部骨折?	1	
外	傷 (火傷ヲ含ム)	8	

  

症例年令別	
幼児, 童子	4
10歳代	8
20歳代	15
30歳代	9
40歳代	11
50歳代	8
60歳代	7
70歳以上	なし
其他不明	24
計	86

  

治療法種別数	
手術 (切開)	14
鋸	1
成形 (欠腎)	1
内臓手術 (腸脱)	2
気管	1
胸部	1
姑息 (主トシテ軟膏)	66
計	86

(同書、巻下、十丁)とある。

ここに追記すべきは「紅毛秘伝外科療治集」に八十六例の当時の外科疾患の症例報告があることである。これは曲直瀬玄朔の有名な「医学天正記」二冊、寛永四年、一六二七と共に貴重資料である。これを一覧表に纏めれば(表第六)、癰疽、腫瘍が主で、感染疾患が多い。そして、外科療法は姑息で、膏薬外科時代と呼ばれる所以でもある。即ち、観血療法は僅か一七%に過ぎず、患者の年齢層も二十台が最も多い。

引用文献

- ① 富士川游「日本医学史」(明治三十七年版)三六五頁、及び「日本医学史綱要」(昭和八年版)九二頁。  
② 新村出「南蛮記」三二九―三四七頁。

- ③ 関場不二彦「西医学東漸史話」上巻、六五—七五頁。
- ④ 古賀十二郎「西洋医術伝来史」四二—四八頁。
- ⑤ 海老沢有道「切支丹の社会運勉及南蛮医学」一二〇頁、二五四頁—二五五頁、二五七頁、二六六頁、三二〇頁—三一頁。
- ⑥ 石原明「医史学概説」一九五五年版、二六七頁。
- ⑦ 海老沢有道「南蛮学統の研究」四九七—五一二頁。
- ⑧ 「阿蘭陀外科指南」十三丁表
- ⑨ 村上直次郎訳「長崎オランダ商館の日記」第二輯、一九九頁。
- ⑩ 同書、二〇〇頁。
- ⑪ 宗田一（薬事日報、第三四三九号）（蘭学資料研究会第六回大会講演要旨）

(2) ブルンシュウイク外科、タグリアコッチイ外科と南蛮流外科との比較

スペインの有名な戯曲<sup>①</sup> *La Celestina* は当時の医学的記事の多い戯曲（廿一幕）だという。美しい女性 *Melibeia* と若い青年 *Calisto* の恋の悲劇である。劇の題をなしている *Celestina* は二人の若人を取り持つ老婆の名である。この老婆は欲が深く、二人の恋人を取持つが、その報酬のことから、老婆はカリスト青年の従者から殺され、カリストも女に会ったばかりで、この悲劇の幕を閉じる。これを調査するに、書中 *Ippocrates et Galens* は云う迄もなく医聖ヒポクラテスとガレヌスである。一般市民の口の端にまで乗っていたのであるから、弘く名医の代表とされていたことがわかる。南蛮医学に關係のある文字を拾って見ると、*Hojaplasma*（甘松香）、松脂は屢々南蛮医学に出てくる。*mal fuego* は悪魔の火でありサンアンソニーの火である。これは丹毒の謂である。又、セレスチナ老婆のセリフの中に見える *Aqua de mayo* パラの水は最も多く南蛮系医書に出る。

又、あの有名なドン・キホーテの作者 *Miguel de Cervantes Saavedra* の父は偽医者（外科）である。街に出て瀉血をし



たり、小外科を業とした。

イスパニアやポルトガルの当時は海外発展の必要から、猶太教、回教、基督教の三つの宗教に所属した医師団<sup>②</sup>が、わが国に關係深い Luis Dalmeida は、こうした医師团的医学の色彩を帯びた僧侶医学である。恰度、イスパニアの修道院医師 Francis de Arces が最も顕れていたというのが参考にならう。当時の外科医は Agüero, Chacón, Frago, Alcazar が傑出した外科医だという。穿顱術、截断術、骨折、碎石術が主な重要手術で、造鼻術はイタリアのタグリアコッチイからうけていたという。彼我較べて、いかなる外科であったかを判断する資料とした。

この時代、ヨーロッパ外科で記載のすぐれて、美しい木版画を挿入し、印刷術の最初の波にのったドイツの Hieronymus Brunschwig の好著、Dis ist das buch der Chirurgia Hantwichtung der Wundartzny von Heyroimo brunschwig, Strassburg / Johann Grüninger / 1497 (Reprint, R. Lier & Co. / Milano / Via Brera 7) を調査し、その他については The Life and Times of Gaspari Tagliacozz, Surgeon of Bologna, 1545—1599. (by Martha Teach Gnudi and Jerome Pierce Webster), 1950. を参考にした。これは当時造鼻術の大成したタグリアコッチイの原著で挿絵のまま挿入されている。前者はシゲリスト、後者はカステグリオニイの今は近き、現代医史学の両碩学の解説がついている。

ドイツ医学は十四世紀からラテン語文書のアルプスを越えて入って、ここに初めてアラビア及古代医学とドイツ医学との交流が行れた。その意味からブルンシュウイグ外科は大部分、当時のイスパニア、ポルトガル医学と大差ないことを認める。殊にブルンシュウイグは Bologna, Padua, Paris にも遊んだという説がある。ブ氏は多読家で蔵書三〇〇〇巻という。しかし、自らはラテン語が書けず、原著はドイツ文である。

原著は六章からなっている。創傷、骨折、脱臼、薬物などが主で、特殊な手術記事は截断術以外にはない。一般医師向きの概説書である。しかし、解剖の重要性を強調し、有名な Anatomia ostium corporis humani (再刻版にも一三九七年とあるが、一四九七年のミス・プリントだという) の木版図が載っている。ブ氏は石灰を使用、二の人骨格を作成したという。肋骨は十二対である。

止血は慣用法として烙鉄を使用する。すでに、医史学上知られているように、周囲組織と共に結紮する法をも述べている。さらに補助法として精神暗示法、Imaginativumを挙げている。これは鷹取甚右衛尉藤原秀次著「外科細漣」慶長十一年 一六〇六 上中下一冊（著者蔵）の異本、「外療新明集」寛文八年 一六六八 上中下一冊（著者蔵）上巻、二十四丁表の四十一、金瘡座敷に呪文の記載と、印の紙の貼布、五十三のシメの張りよう、（芒葉を共にシメになえておく）がある。これは医師側の外科処置の神聖、清浄化ではあるが、患者への Imaginativumにも当てはまる（同じ鷹取流の曾根祐積家伝「金瘡一流療治」写本 一冊の十三に「手負ノ座敷作様」の前記と同じ記事がある）。

鎮痛は次の薬剤を使う。Papaneris alssi, Papanuris nigri jedes et quinin, Opium theossicum, Croci orientalis, Corticum mandragora. Lignum aloes, Cinnamon, Castorium を煎剤として内服せしめている。これが「阿蘭陀外科指南」には次のように現われる。即ち、④ ハッハアフリス（罌粟）、トルメンテフ（罌粟葉）、ヲウルヘイ（蘆薈<sup>ロカイ</sup>）、カネイラ（肉桂）、又はシナモミ、であるが、他の三書にはない。ヒヨスはオランダ系の嵐山甫庵の「蕃国治方類聚」写本二冊（天理本）にヲツヒヨム（ケシノヤニ）鎮痛剤として現われる。

銃創に対しては、銃創毒について余り触れていない。Theriacの内服が行れる。眼内鉄片除去に磁石を使っているのは特異である。（忠庵には銃創毒の記載がない）

ブ氏外科時代の外科器械の美麗な木版画がある。各種の外科史書に転載されている。全部で二十三種に過ぎない。しかし、これは南蛮系の山本玄仙著「万外集要」記載の計十一種よりはむしろオランダ系の前記、「蕃国治方類聚」所載の二十種の外科器械に似ている。

次に特記すべきは Zeichen des Todes der Wunden (Das II Capital) である。これには美しい木版画で、とくに心臓部外傷図がある。忠庵の「秘伝」には必定死疵之事と、不死疵療治之事の記載がないが「指南」には、この記事がある。栗崎流には記載形式の特徴として、金瘡生死見分之事、金瘡五惡之事、七種之惡病之事、五善七惡之事の記載がある。しかし、未だヨーロッパ的影響のない「金瘡之書全部」明曆三年 写本・一冊（宗田本）には疵死生ヲ知夏、十善十惡ノ相ヲ知夏

の記事があり、この種の記載は必ずしも南蛮系に限ったものではない（パレ系の「外科宗伝金瘡跌撲篇」及び「外科訓蒙図彙」に該当事項がある。とくに後者には七悪の症があり、後者には死生を試みるに童便をもっている。もっとも陳実功の「外科正宗」第十は論病生死法である）。

栗崎流は前述したように「秘訣」が最もオリヂナルなもので、これに較べて「師語録」や「本末」は全く体系化、その上漢方化した点がある。今これらとブ氏の前記本の内容を比較するに、両者に金瘡生死見分之事がある（栗崎には必ずずこの記事がある）。忠庵にはこれがない（もっとも「指南」にはある。解剖については指南の経絡が最もよくブ氏の *Vonder Anatomie* に似ている。栗崎流は五臓六腑之辨で、心臓の解剖などは、外科向きのもので医学思想は漢方的である。Gasper Tagliacozzi, 1547—1599 は年代的には新しく、南蛮時代と同時代であるから、その影響という意味よりも、その

時代の外科全般の実状を知る一資料として採った。造鼻術はインド系のもので *Sushruta* によって記載されているという。その著 “*De Curtorum chirurgia per institionem*” は死の二年前の出版である。多くの美麗な挿絵が特徴の一つである。辨状植皮を使ったり、現在でも使用するインド法は南蛮には全く現われていない。むしろ後年、吉雄流の中に一部出てくる。造鼻術は刑罰上、鼻の切断、頬の損傷が行れたのに対する成形法として発達したもので、当時わが国にその慣習がなかったので、必要がなかったのであろう。

以上を総合すると、次の結論に達する。

- 1、粗朴ではあるが解剖学がある（前ヴェザリウス及び前ハヴェイのものである）。
- 2、ヒポクラテスから出てガレヌスで完成された四体液病理説が医学思想の基盤である。即ち、*Sanguis*（好血と訳す）*Chorea*（血のウワズミと訳す、黄胆汁）、*Phagma*（血の内ノ水と訳す、粘液）、*Malan choria*（血ノヲリと訳す、黒胆汁）である。

3 「ヘイビリ」（熱）、単純ではあるが、炎症思想を述べている。

4 ⑥ 外科的療法、

- (1) 止血法は動靜脈性出血の區別と、烙鉄の使用、
- (2) 血管の周囲組織と共の結紮、
- (3) 焼針、平針等のメスによる靦血術。膿瘍に「ロフトウリヨン」、「水銀劑」の使用、
- (4) 頭部外傷に穿顱術、
- (5) 欠唇手術、駢拇、水彈手術、
- (6) 動靜脈瘤の記載、
- (7) 神經（ネルボ）、脊髓の外傷の記載、

ここに追記すべきは中村宗璜が、その「紅毛秘伝療治集」の中で「予ガ述フル所ノ経絡骨部ノ説、医書ニ所論トハ少シ差、誤可有是ハ紅毛夷ノ伝授ヲ互ニ書ニ造リ、彼レカ治法ヲ用ントナレハ彼レカ所説ヲ不可棄、若シ此説ヲ医書ニ取合テ用ハ弥々術学ノ妙効有ラン、今金瘡ノ治法ヲ一々後ニ開陳ス」とある。即ち、当時にあつては、これらの南蛮系で得たヨーロッパ的な解剖については「誤可有是」といい、信念としては漢方の五臟六腑説に拠りながら、南蛮系の本を読むための理解の方便として、このヨーロッパ的解剖の知識が便利だといった口吻が見られる。解体新書期のヨーロッパ解剖学の正確性に対する驚嘆はどこにも現われていない。この事實は、当時の南蛮系医書に、多くの漢方的表現方法や疾病分類法が現われる事實と併せて興味深い事である。

たとえば栗崎道有の自筆本と思われる「栗崎流外科専方」（前出）の「癰疽、瘡癤」は二十九項目につき漢文にて記載、欄外には「外科正宗」の註を記し、病論は漢方に拠っている。「癰は腸属六腑、主表、陽気軽清……」のようである。とくに栗崎道有正弘が編輯し、仙台侍医、瘍科猪股松順独幹が訓点をした「外科集成」（前出）は五十巻、四十七冊の大冊であるが、その形式は全く漢方化して了っている。これらは飽迄漢方に対する強い執着が見られるのである。

### (3) 栗崎流外科

・ 「栗崎流金創秘訣」の意義

栗崎流の写本の流布は、忠庵に比し、非常に多い。その集約整理は関場氏によって完成しているが、著者は年代的には相違はあるが、富士川本の「栗崎流金創秘訣乾坤一冊、享保六年四月晦日 一七二一（写本）を最もオリヂナルなものとして採りた

い。この写本は栗崎道有正羽書とあって、四代正羽の増補校正した正羽自筆本である。その目録はヨーロッパ的分類で、内容と共に漢方的な片鱗さえも発見できない。小型本なるも、能筆であって、殆んど現代にも通じうる近代的な記載様式である。

目録 乾の巻、(頭疵、面部、耳部、頬並口中、首並咽喉、欠唇)。

坤の巻(肩部、手部、胸脇、乳腹、手足並指、惣身)。

この「秘訣」を通じ、和様の表現法ではあるが、比較的正確な解剖術語を使用している。この事は劃期的な記載法である。「疵、胸、アバラ切り通り、肝臓ノ上ニウスキ皮有、是ヲ世俗ニミノキモト云、これは胸脇の金創部に出ているが、さらに「臍ヨリ上ノ疵は小腸出ル、胃ノ臍出ル事モ有、又胃ノ臍ヲマトイタルマクヲ世俗ニ油腸ト云、入カタキハ少ツツ切取テ腹ニオサメテ良、但世俗ニ腹ノ皮ノ間ニマク有、其下ニオケ胴ト云テ常ハヤワラカナリ、氣ヲ張ル時ハ骨アバラノ如カタクナル」。この小腸、胃、油腸、オケ胴何れも正しい。オケ胴の記載は *défenſe musculaire* の症候を、よく表現し得ている。とくに大腸は「大ニシテ色赤シ」といい、小腸は「色青クシテ小キ也」といって区別をし、腹部損傷による腸脱患者の処置に「腸サバキト云ハ其ワタ出タルヨリ殊々ニ一編ツツサバクリ見レバ、ソノ本末知レル也」とある。この記事は当時においては、実際的で経験者でなくては云い切れないところである。腹の切りヤウの中に「阿蘭陀ニテ疵ヲシモクニ切破リテ入ルト有、夫ハ悪シ。疵ノ長ニ随テ六、七分程モ切可キ也、其時ハ皮斗切レハ腹ノマクハ脂ヲ以テヨクサケバ広ク成ル也、アヤブムベカラズ、病人ヨワリニ不成、疵切破ル事ハ癰切りヲ以スヘキ也、仍テ常々癰切りノ先ノツント切レルヲ所持スレバ此時ニ入也、腸ヲヨセテ皮ヲ切ル時ニツント切ル先へ、人サシ指ヲカケ廻シワタ先(腸)ニ右ノ癰切りヲ不掛ヤウニシテ疵口ヲ少切、ヒログル也」この記事なども直載で、類書に見られない修飾のない実際の記事である。勿

栗崎流外科

(表第七)

▲金創秘訣		頭部、面部、耳部、頬並口中、首並咽喉、欠唇
栗崎道有正羽 享保六年 (一七二二年)	南蛮流病医書	肩部、手部、胸脇、乳腹、手足並指、惣身、
金瘡要術	●栗崎流外科秘事	簡素、記載類書中最モ科学的、自家經驗的(症例加入)
●栗流外科秘書	●栗崎流外科秘録	解剖記事(殆ドナシ、心腎二經、油膜ヲケ胴、大小腸生理、膀胱)
●印ハ多分ニ 漢方化シタ転 写本	▲金舞師語録全書	切落シタル指ノ縫合三例
栗崎道有正羽 享保六年 一七二一	南蛮流金瘡外科 問答録 師弟問答 外科專方	胸部(血胸—胸血落リ、焼酒注入法)
▲南電流栗崎金瘡 本末撰奇 (井上貞重本)		内臓(腹壁切開—立切、シモク切、肝外傷、腸管縫及柳木皮)
南電流外科真伝 南電流金瘡仕掛 一子伝集 南電流外科実用全 書		陰莖外傷(尿道狭窄防止—ヤハラカンセンヲサシ置)
上	一	附疱疹後ノ鼻腔狭窄擴張法
下	二	機能恢復ノ顧慮(屈伸部機能考慮)
	三	風ヲ引サルヤウ早ク疵口ヲ可包
	四	焼酒、玉子、醋、油、針、糸、烧金、添木
	五	金瘡生死ノ見分
	六	焼酒洗滌、止血、縫合、玉子煉合モメン、泉醋木綿、木綿、抜糸後処置—木綿カラホツシ、愈膏藥
	七	焼金(止血)
		腸整複法
		栗崎家五徳、師語録全書発端、道喜先生禁戒詞
		金瘡名目、定義
		金瘡生死見分、五悪、七種之悪症、金瘡之脈、急処次第、五善七悪、
		五体之色体、五臟六腑之弁
		巻木綿、卵木綿、酸木綿、保津志、手拭木綿
		焼酒、鶏卵、敵醋、引油、
		金創縫針、金瘡縫糸(禁) 本方糸引、烧金、添木
		血留、創ニ栓ヲ指心得、金瘡膏藥、金物改ル、
		縫創仕掛、不縫疵仕掛、手負向時心得、
		竹木石ニ当タ疵、金瘡淺深ヲ見ル心得、眼疵仕掛

論、四代正羽時代にはオランダ系の時代である。しかし、この中に初代の栗崎道喜時代のオリヂナルなものを多く温存していると思う。

その他、頭疵の中に「腦ニ刀入タルハ眼サシカワリテ、上目ツカイシテ振イ、ソリケ出ルモノナリ」この記載も、他のすべての記載の通り、その実地経験者でなければ記述できないもので、「昔、長崎ニテ父ノ代ニ腦切ハナレ、腦汁出タル者治スル、吾長崎ニテハチワレ（ハチノ骨は頭蓋骨である。ソリケは瘰癧フエは気管）」を治癒せしめた症例の記載、さらに四肢切断について、「手ハヒヂヨリ先切落、腰ハヒザヨリ先切落シタルハ十二九ツハ快氣、元ヨリ切落シタルハ十二九ハ必ズ死ス」とし、指の離断、さらに「左ノ手ノ甲ヨリ一文字ニ切落ス」患者について、かなり詳しい症例記載があって、離断直後、縫合せるも、「骨ニ黒ミツキ」次第に黒色化して行く状態を克明に書いている。

解剖の和名攷については富士川本に著者不明の写本、「藏府和名攷」がある。素問金匱真論、や和名抄、医心方などによった旨があるが、肝（岐毛）、脾（与古之—寄来ノ義、ヨセコ運化食物也）、肺（布久布久之）、腎（无良度—当聚処之義、言精氣所聚之処也）、胆（以—射之義）、小腸（保會和多、又古和多、—和太者、和多和加未留之略語、保會和太古和太共対於保和多、即大腸之略）、胃（久會布久路、毛之波美—尿囊之義）、大腸（波良和太、又於保和多）である。解体新書期前の外科に現われる解剖名はこの和名による場合が時々見られる。しかし、大勢は肝、心、脾、肺、腎の五臓論によってゐる。

### ⑤ 栗崎流薬方

次に栗崎流の薬方であるが、そのオリヂナルに近いものとして「一子伝集」写本享和元年（富士川本）を採った。栗崎流家伝秘極抜書で小冊ではあるが、漢方化していない内容を保っている。巻末に長崎南蛮流栗崎道意喜長、門人椋崎道清喜秀とある。その薬方も主に引薬と痛止薬と腫物表へ出膏薬の三種類に大別され、とくに痛止薬は「イノント汁、臼ニテ搗、天目十盃、茴香汁、同三盃、ハタカ麦十五匁、カチ麦、同上、右各四味水五合ヲ入、二合ニ煎ス、水気半分ニ減ル程煎シ、其後胡麻油五合ヲ入、再煎シテ水気頓ニ減ル時、椰子、天目三盃程入煎シテ水気段々ニ減スル時、乳香、十匁入、蠟

二十丸程入、水気ナキ時布ニテ漉、随分軟カニ煉」忠庵の痛止押散薬にデヘンシイボンや宗璵の犬山椒膏、タハコ膏、蝸牛膏、「指南」を書いた浪華陰舎は最も多種多様の薬物を使用している（とくに「指南」巻四、十三丁にあるトウトネツトル、ツリガネ草の該当記事に「乳岩初発ニ付レバ押散ス」とさえある。これは明らかにオランダ系である）。何れにしても処方によや、この流派特有の形式はあるにしても、前記忠庵、宗璵、華浪陰舎と比較して個々の薬物には殆んど相違はない。

四代道有正羽の自筆本「栗崎流外科専方」一冊（富士川本）は薬剤について最も詳細であり、栗崎流と称する二十六方を挙げてはいるが、その個々の内容はすべて忠庵と大同小異である。

何れにしても栗崎流のオリヂナルに近いもの程、金瘡を主体としたものである。それは「栗崎流師弟問答」一冊（著者蔵）や「栗崎流問答録」一冊（富士川本）を通じても現れているし、「栗崎流金瘡書」一冊（著者蔵）として「金創秘訣」

上下二巻の謄本が弘く行れたが、さらに「南蛮流栗崎金瘡本末撰奇」一冊（著者蔵）として栗崎家五徳と栗崎家師語録以下二十章に現われたところも終始金瘡である。とくに忠庵系や、他の南蛮系と異なり、実際的で、巻木棉（縛帯法）の記載のあることである。これは忠庵系には見られないところである。（「栗崎流金瘡書」は勿論「金創秘訣」の整理統合して成ったものではあるが、頭部以下金創部の分類十二のように大綱は一致を見るが、細部は著しい修正が見られる）。

◎ 「南蛮流栗崎金瘡本末撰奇」（特にその五臓六腑之辨）

「南蛮流栗崎金瘡本末撰奇」は栗崎家五徳をはじめ、栗崎家師語録全書発端、道喜先生禁戒詞などに夫々栗崎流のアウトラインを知る諸事項の記載がある。そして、それは二代以後に逐次成ったものである。これは五臓六腑之辨についてもいいうること、で、「指南」の解剖記事が新鮮で、その心臓の生理解剖は正しくヨーロッパ的であるのに比し、「本末撰奇」に現われる解剖記事、例えば心臓は「心ハ肺管ノ下、膈膜ノ上ニ有テ背ノ第五ノ推ニ付、其形尖円ニシテ蕊ノ如シ、其中ニ竅アリ、多小同シカラス、四ノ糸有テ、四臓ニ通ス、君主ノ官ニシテ神明ヲ出シ衆理ヲソナヘ、万変ニ応ス」さらに腸、膀胱、腎の記載の後で「心包絡へ心ヲ包ノ膜ナリ、心横ノ膜ノ上堅ノ膜ノ下ニアリ。其形細キ筋膜アリテ絲ノ如シ、心肺



ト相連ル位相、大二ツ其所臚中に当ル、臣使ノ官ニシテ喜末ヲ出シ君ニ代シテ夏ヲ行フ、三焦ハ人ノ三元ノ氣ナリ、総テ五臟六府、榮衛經絡内外左右上下ノ氣ヲ主ル決詔ノ官ニシテ水道ノ出ル所ナリ」形態に於て、當を得ているが、漢方的な修飾から脱することができなかった。

長崎の栗崎門人、井上道英の書いた「栗崎外科」一冊 明和辛卯年仲秋穀且 富士川本には「夫南蛮流栗崎家伝者原雖

無書而亦有之、余自蚤歲隨師父學之凡二十年、未曾聞有其書、余及辭卿慾寄寓於他邦師父乃携於所伝之書未嘯」とある。

これは栗崎道喜述ぶるとある赤山孤山の「栗崎流南蛮外科開基録」一冊 著者蔵の記載とも一致するところで、蛮国から持参の蛮書は当局の命によって、すべて焼却され、栗崎流の外科はこのように道喜の記憶と、栗崎家五徳に現われた

四子、即ち嫡男道善、次男道悦、三男道保、四男道有の四子協力、研究によって成ったもので四子は往診や治療のすんだ

毎夕後に「夕会燈下、屢論談、然後、撮其的要、記以為方」である。即ちその内容も「考三国之医術薬方物品物等、以治療

標本」である。道喜のヨーロッパ的な金瘡外科がこのように四子によって、種々修正修飾された事実を物語っている。従

って、この二代から、逐次体系化がはじまり、道有時代に完成される。

「金瘡師伝録」一冊 写本 富士川本には手負に對する心構えとして「先、風ヲ引入レサルヤウニ疵口ヲ包ム可シ」これは創

の感染考慮である。従って「巻木棉ヲ拵ヘ置、次ニ焼酎、鶏卵、酢、油、焼鉄、添木ヲ拵置キ、疵ニ取懸リ、少モ間ノ

抜ケサルヤウニ一時ニ仕廻シ置事、兼テ可心得者也」——これは平素救急処置に對する準健である。寛文六丙 一六六六

午歳三月、栗崎道喜、在判」さらに「鳥飼金兵衛尉剃髮シテ号道節ト号スト、元禄十三 一七〇〇 庚辰年春、細川越中守綱利為家臣

賜俸祿二百石、鳥飼道節在判」又「元禄十四 一七〇一 辛巳歳二月、堀八左門尉、当道三ヶ条極秘唯受一人秘伝、欠唇、駢拇、水彈

右治療伝授ノ輩ニ者与免状、予今年於肥後隅本先生從鳥飼道節得其伝……大槩私ニ注之、如左、多節齋堀意敬述」この記

載があつて、以下欠唇以下三手術法が述べてある。

#### (d) 栗崎流癰疽論

時代が降つて、「栗崎流秘書」外題栗崎流外科秘書 写本（富士川本）これは穎川陳鶴翁記号道癰、平山道輝写蔵、号無味

庵、平山道輝、于時文政五壬午歲後秋とある。又「栗崎流惡症療治秘伝」二冊（富士川本）、さらに栗崎流と想像される

「南蛮流外科心伝」二冊、五十卷、四十七冊、官医瘍科栗崎道叔正弘編輯「外科集成」仙台侍医瘍科猪股松願独幹訓点などは、ヨーロッパ的な道喜の面影は

見出し難く著しく漢方化して了っている。ただ「外科集成」の卷之五に癰疽刀針論があつて、針法、烙法、砭法、蟻針法、破頭代針法、用針勿忌尻神論の觀血手術にやや、オリヂナルなものの片鱗を認めるに過ぎない、

當時の癰疽論は全く漢方的な強態を具健し、理解に困難であるが、「外科断驗」著者不明が遺っている。病名を簡粗に述べてあり、理解し易い。左にその一部を摘記すると、

「癰、諸ノ大ナル腫物ノ名也、六腑形リ根ヲサシ底浅クシテ腫高、皮薄シ。

疽、大ナル腫物ノ惣名ナリ、雖然、疽ハ臟ヨリ根ヲサシ、底深クシテ腫物皮厚シ。

瘡、大小一切ノ瘡ノ惣命也。

癰、根浅ク小腫物ノ惣名ナリ。

癭、遍身何クニテモ和ニ腫塊テ、不備、色ツカスシテ頭ムクロト平ク、或ハフリメキ、或ハ堅、又ハ梅桃ヲ埋タル如クナル。結核トテ塊リ、丸ク、クルクルトシテ堅ク、皮肉ノ間ニアル物、瘤ハ小クシテ堅シ、破ツテヌウモ苦シカラズ。

癩、楊梅瘡、丹毒ナトノ類也。

瘍、大、小兒ニヨラス皆頭ニ発ス、小瘡ノ類ノモノノ如也。

疥、遍身ニ砂ヲマキタル如、細瘡、出テ汁ナク、痒シテ搔ケハ、ホコリ立テ迹、白ク乾ク、瘡ノ惣名也。

癬、惣身ニヒシヒシト出テ病ヲ作、瘡ナリ。是ヲ世ニカユガリ瘡ト云也。亦熱瘡ト云ハ汁タリテ久ク不癒、是ヲ癬トモ

云也。

風腫、皮フニ入ツタル風ヨリ発シ、初、頭ナク、ムクムクトシテ、サシテ色付モセズ、余リ痛モセス。

風毒、内ニ入タル風ヨリ発ス、故ニ此腫物ヲ傍ヨリ押テモ不動、是根ニ付タル印也。

風毒腫、初発ニハ必傷寒ノ如ニ病付、悪感発熱シテ殊外煩也、是モ肉ノ厚所ニ発ス、此病ハ骨ノ内ヨリ出ル、故ニ心骨

随同ニ發、腰ノツカイ、肩ノ廻、股ノ付、ハ膝ノ上下、或ハ肘、何レモ骨ノ続目ヨリ發スル也」。

この本には火針や蛭飼の記事があつて栗崎系のものである。針(刀)の使用法は詳細を極めてゐる。蛭飼の記事もある。

### ◎ 栗崎道喜の墓

栗崎道喜以下の家譜については、すでに諸書に發表されてあるから、補遺の余地すらない。しかし、道喜の墓が長崎の禪林寺(風頭山麓寺町)に耕牛墓と徑をへだてて反対側、木立の中に、蔓草のからんだ墓碑二基があつて、積、顕曜院道喜正元居士、それと並んで室の妙栄真尼の碑銘が見える(古賀氏「西洋医術伝来史」二五頁には顕理院とあるが、碑銘は顕曜院である)。これは存在の文献はあつたが確認されてないところで、著者先年長崎を訪ね、拓本によつて認めえた。

### ① その他

次に前記「栗崎流本末撰記」所載の五脇六府之辨である。確に「指南」の記事のように、ヨーロッパ的、そのものの記載ではないが、真に解剖を実地に行つた上での記載ではないかとの疑問が生ずる。「心ハ肺管ノ下、膈膜ノ上ニ有テ、背ノ第五ノ椎ニ付、其形尖円ニシテ莖ノ如シ、其中ニ竅アリ、多少同シカラス、四ノ糸有テ四臟ニ通ス」——これは本の記載というよりも、実際に人体を解体し、それを親しく観て得た記録の面影がある。著者は先年「長崎県史料」を入手(明治四十五年一月廿五日発行)、その中に北松浦郡平戸町嵐山ミサ氏蔵「人体解剖図」一卷が写真版で載つてゐる。先年甫庵の直系、嵐山二郎氏に照会したが、現在発見しえないとの御返答を得た。藪内清教授によれば現在、一卷の解体図が平戸の博物館に所蔵されるとのことである。道喜の次男、道悦は「応肥前国松浦君之召、往平戸」(栗崎家五徳)これと嵐山家との関係は興味がある。果して、両家の何れかが、この頃古く解剖を実施した疑がある。何れにしても、その解剖はヨーロッパ的である上に、理論化されたものでなく、解剖によつて實際に得られた所見の直載な記載である。しかし忠庵と異なり、医学論の片鱗さえも見出しがたい。「金瘡本末撰奇(記)」の金瘡生死見分之変も金瘡五悪之変、七種之悪症之変など金瘡予后判定法は道喜のオリヂナルなものでなく、道有、喜長以下の筆である。著者に若し憶測が許されるや

ば、前述の道有自筆本から察して、道有の「秘訣」を喜長若くはその門人たちによって加筆訂正して、「栗崎金創書」と「金瘡本末撰奇」という一つの型となったものとしたい。

御外科衆集には「二百表、両かえ町二丁目杉本忠恵。二百表、さるがく丁、村山自伯。三百表本郷四丁目栗崎道有元禄九年五月吉日（宗田本）とあるところから、忠庵の女婿、杉本忠恵より禄高が高く、又かの有名な元禄十四年三月十一六九六

四日の殿中、浅野内匠頭長矩の刃傷事件に際し、正羽、道有が吉良上野介義央を治療したという事実（その考証には触れない）と思ひ併せ、一般に栗崎流が弘く行われていた想像がつく。

### ⑧ 考 按

栗崎流のヨーロッパ的のものは初代道喜において全てであり、爾後二代の四子以後逐次、和漢洋の三国医術の加味があつて、逐次漢方化に傾くのである。道喜すら、日本における医学活動には一つのヨーロッパ医書もなく、専ら南方滞留時に得た技術に頼つたのであるから、医学思想は全くない。即ち忠庵系が僅かではあるがヨーロッパ医学思想の片鱗を合せていたのに反し栗崎流は終始一貫して実用的である。但し、その解剖には特色が見られる。（尤も栗崎道喜は架空の人物との説をなす人もある。）

### 引用文献

- ① "Celestina," translated by Maek Hendricks Singleton, 阿知波五郎「南蛮医学のこと」九大医報第三三卷第一号、四二頁
- ② E. Gurlt: Geschichte der Chirurgie, 1964 (Nachdruck), Bd. II, ss. 122—133.
- ③ 「阿蘭陀外科指南」巻四、十五丁裏
- ④ 同書、八丁表
- ⑤ 同書、十六丁表
- ⑥ 阿知波五郎、前述論文

(1) パレのいふ

④「鉄によって治しえざる創は火によって治しうる」という古い学説を破ったのがアンブローズ・パレ Ambroise Paré, 1510—1590 である。新しい⑤銃創治療法が創案されたことは有名である。とくにパレの⑥「Je le pansay et Dieu le gerarit, 一五三七年のトリノ戦中、リゴウ侯隷下のド、モンテジャン大佐統率部隊附軍医としてラー大尉の右足関節銃創治療の際、発した言葉であり、謙虚なパレの人柄と外科における自然治癒の重大性をうたったものである。この記載されている『Voyages et Apologie, 1585 が載っているのは J. P. Malgaigne, "Oeuvres complètes d'Ambrroise Paré, Paris" 1840 ではなくてその④四版である。パレは当時の有名な解剖学者ヴェザリウスとは特別な交友関係にあった(⑥一五五九年六月二十九日パレとヴェザリウスがフランスのアンリ二世の死の床に対診しているし、この章の底本とした Opera chirurgica, (労研本)の解剖の章に載っている解剖図譜の中にはヴェザリウスの Fabrica に酷似するものが多い)。何れにしても、その⑥年表を通じて観察するにパレの解剖学への関心は特別である。

パレ研究は欧米医史学者によって研究し尽されている。従って、前述の新しい銃創治療論と並んで、外科史上最も重要な事は、一五五二年三月ダンピリエの捕虜について最初に敢行された血管結紮法による⑦四肢切断法である。

バルザックの「カトリヌ・ド・メヂシス」Sur Catherine De Medicis (バルザック全集第十六巻、昭和十七年、河出書房版)にパレの記事が五ヶ処でてくる。この小説は ETUDES PHILOSOPHIQUES の表題が示すように、当時の「権勢の真の姿」を「絵のように」描くのであったそうであるから、すべて虚構ではない。とくにフランソワ二世に⑧穿頭術トレパンをするか否かの記事は医学的にも意味がある。この作品によればパレは、それ迄に穿頭術を三度経験済みだという。最初の手術は、メッツ攻略の際、ピエンヌ氏に施し救命し得た症例、第二症例はある乞食に施して、矢張り救命し得た例、第三症例は巴里の貴族に敢行したもので何れも脳内膿瘍形成であって、予後は良好である。この小説はパレが第四回の例としてフランソワ二世に敢行しようとして徹宵、頭蓋骨を前に研究に余念のないさまを描き、結局実施できなくてフランソワ

二世は逝って丁了。

パレの⑩伝記やその人物、性格には、パレの温厚で仁愛に満ち、ラテン語を解せず、学殖よりも正確な臨床経験の上に成立した。パレ外科であることが強調されている。

パレ外科は前述の銃創治療法や切断法以外に、⑪動脈瘤、⑫ヘルニヤ、⑬骨折、⑭脱臼、⑮白内障、⑯碎石術、⑰結石の諸項目について夫々従来の外科からぬきんでた記載が見られる。

従来、四肢切断は、その血管の処置を烙鉄で焼灼していた。それを前述のように血管と周囲組織を分離せず、一括結紮したことである。これは近代外科に大きい意義がある。

#### 引用文献

- ① W. J. Bishop: "The Early History of Surgery" London, 1960. pp. 79—84.
  - ② Logan Clending: "Source Book of Medical History. Dover 版 1942. pp. 189—193.
  - ③ Geoffrey Keynes: "The Apologie and Treatise of Ambroise Paré, containing the voyages made into divers places with many of his writings upon surgery." Chicago, 1952. pp. 130—142.
  - ④ Ibid., p. 21.
  - ⑤ 阿知波五郎「余纏帯し、袖これを癒し給う」。九大医報、三十二卷三号三八—三九頁
  - ⑥ Wallace B. Hamby: "The case reports and autopsy records of Ambroise Paré." Springfield, 1960 の序文。
  - ⑦ Howard W. Haggard: "Devils, Drugs, and Doctors." New York, 1929. p. 157.
  - ⑧ Wallace B. Hamby 前記書、巻頭年表。
  - ⑨ Geoffrey Keynes 前記書・pp. 146—160.
  - ⑩ 「カトリヌス・ド・メゼンス」(バルザック全集第十六卷、昭和十七年、河出書房版) 252—253頁。
  - ⑪ L. Delaruelle, M. Sendrail: "Textes choisis de Ambroise Paré", Paris, 1953. pp. 22—44
- Ibid., pp. 45—54.

Ambroise Paré 年表 (G. Keynes, The Apologie and Treatise (Wallace B. Hamby, Oeuvres 英訳カラ) (表第八)

年代	事 項	参 考 事 項
1510	Paré ハフランス Laval (Bourg-Hersent) ニ生ル。	1519 ダヴィンチ歿
1533	パリーノ Hôtel-Dieu (Compagnon-chirurgien)。	1525 阿佐井宗瑞「医書大全」
1537	Montejan 隷下軍医トシテイタリア (Turiu) 出征。	Paracelsus 没
1538	Montejan 逝去, パリーニ帰還。	1543 Vesalius, De H. Corporis
1541	Jeanne Mazelin ト結婚 (St. André-d.-Arts)。	
1545	La Methode de Fraiter les Playes F.P.H. 出版	
1547	前記ノ蘭訳版出版。	
1549	Briève Collection de l'Administration Anatomique 出版。	
1552	Damvilliers 捕虜ニツイテ最初ノ四肢切断ニ血管結紮。	1553 L. Almeida 平戸ニ来ル
1554	Hôtel-Dieu デ受験。	1555 G. Agricola 歿
1559	Henri II 受傷 Vesalius ト対診。	
1560	François II 死去 (中耳炎)。	
1561	Anatomie Universelle du Corps Humain 出版。	
1561	5月4日 左足関節複雑骨折。	
1562	La Methode Curative des Playes, Fractures de la Teste humaine. 出版。	
1564	2月3日 Dix Livres de la Chirurgie 出版。 (切断手術ニ血管結紮使用ノ最初ノ報告)	1564 A. Vesalius 歿
1565	1月 Montpellier デ蛇ニ咬マレル。	1566 道三「雲陣夜話」
1568	Traite de la Peste, de la petite Verolle 出版。	1568 京都, 南蛮寺建立
1572	Cinq Livres de Chirurgie 出版。 8月24日 St. Bartholomews 虐殺。	
1573	Deux Livres de Chirurgie 出版。 11月4日 妻 Jeanne Mazelin 死去53歳。	
1574	1月18日 Jacqueline Rousselet ト再婚 Charles IX 薨去 (結核) Henri III 戴冠 Paré 侍医。	1574 曲直瀬道三「啓迪集」 栗崎道喜呂宋ニ渡ル (9歳)
1575	8月 Ces Oeuvres de M. Ambroise Paré, etc 出版 (65歳)。	
1579	Oeuvres 再版 (69歳)。	1579 曾根「金瘡一流療治」
1582	1月 Oeuvres 三版 (72歳)。	1581 鷹取秀次「外療新明集」
1582	Paré, 門下 Jacques Guillemeau ニヨリ Oeuvres ラテン語訳版出版。	1582 慶祐「外科捷経方」
1582	3月 Discours d'Ambroise Paré (De la Mumie, de la Licorne, des Venius, et de la Peste) 出版。	
1583	Pouillet ヲ助手トシテ 監督指導ヲシテ切断術実施 (73歳)。	
1585	Oeuvres 第4版出版 (75歳)。	1585 吉益半笑齋「換骨秘録」 沢野忠庵「南蛮流外科秘伝書」
1589	Oeuvres 第5版準備 (出版ハ1598年)。	
1590	12月20日 80歳ヲ逝去。 12月22日 St. André-des-Artsニ埋葬。	1594 曲直瀬道三歿 89歳

- ⑩ Geoffrey Keynes 前掲書 pp. 95—98.  
 ⑪ Ibid., pp. 99—116.  
 ⑫ Ibid., pp. 160—172.  
 ⑬ Ibid., pp. 171—184.  
 ⑭ Ibid., pp. 184—188.  
 ⑮ Ibid., pp. 189—196.  
 ⑯ Ibid., pp. 195—200.  
 ⑰ Waler u. Brunn: "Geschichte der Chirurgie," Bonn, 1948. ss. 49—50.

## (2) 紅夷外科宗伝

楢林鎮山の「紅夷外科宗伝」は不思議な本である。もし訳書とするならば日本最初の医学関係訳書である。しかし、この本以外に、殆んど同じ内容をもったものが、西玄哲の「金瘡跌撲療治之書」一冊享保二十年(富士川本)と伊良子光頭写本(一七三五)の「外科訓蒙図彙」明和六年一七六七二冊(富士川本)がある。このように相前後して同じ内容の本が世に問われたことは、奇異なことと云わねばならない。

### ① 「紅夷外科宗伝」作者考史

「紅夷外科宗伝」についての考え方も、色々変って来た。古くは①菅沼貞風氏の平戸藩医嵐山甫安の訳述になるとし、當時は富士川游氏も日本医学史に甫安説を採っていられる。次で大正四年に、当時七高教授だった②武藤長平氏が「歴史地理」に「紅夷外科宗伝」の作者考を発表され、楢林鎮山による説をたてた。関場不二彦氏、③古賀十二郎氏は同じく楢林鎮山説を支持し、仏人の Ambrose Paré, 1510—1590 の外科書の翻訳だとされた。そして、楢林家秘蔵の蘭訳パレ外科書の写真版が載っている。④岩熊哲氏はパレの "Oeuvres completes" (九大本) と比較対照して、翻訳(抄訳)だとされてい



る。

著者の見た「紅夷外科宗伝」は長崎大学本<sup>二冊</sup>、その他、長崎の渡辺庫輔氏蔵本、これは榎林五世の得生軒時敏自筆の本であるという。杏雨書屋蔵のものは、所謂、嵐山本である。前記の本には夫々貝原篤信（益軒）の宝永三年（一七〇六年）の序文がある。

その他には滋賀県八幡市在住の伊良子道牛や光頭の後裔であられる伊良子光義氏の「金瘡跌撲療治図巻」（宝曆初年写と、京大本。さらに宗田本（踞山堂本）。そして市立神戸美術館蔵の伝荒木如元筆、「外科手術図巻」と著者蔵の関場不二彦氏旧蔵本を夫々参考とした。

### ⑥ 外科宗伝成立の考証

(イ) 富士川本の西玄哲の「金瘡跌撲療治之書」（大型享保二十年（写本一七三六））の巻末に「右本書云ハ阿蘭人直伝秘書也」との記載がある。

(ロ) 市立神戸美術館の菅瀬正氏の御厚意により、前記「外科手術図巻」の奥書を、ここに再録することができた。即ち、「当流秘事不殘令相伝畢已來執心輩於有之ハ其人撰相伝可有之候依免状如件

寛政二〇年三月

吉雄幸朔

永章花押」

(ハ) 長崎の渡辺本（前述）には得生軒時敏先生五世榎林潔と記してある。益軒「雑記」には、肥前国の条に「榎林新五右衛門、長崎和蘭通事、善外治、乞予字与軒号、又紅夷流医者ヲ代乞序、而与之」とあり、この記事の上段に「宝永五二剃髮号栄休」と註し、益軒の「居家日記」の宝永三丙戌（一七〇六）の条に「岸本道仙ニ丙戌ノ三月十日ニ作字説遺ス、行怕、又彼請ニ依、長崎紅夷通事、榎林新五右衛門軒号並字ヲ書付遺」とあり、さらに同、正徳元辛卯（一七一）の条に「長崎、榎林栄休（鎮山）ハ本号之由」と出ている。

これから見て、檜林鎮山は新右衛門を改めて新五右衛門といったのである。

(二) 「檜林雑話」にも檜林氏は佐々木高綱の裔だとし、筑後、水瀧郡檜林村を領した。「佐々木四郎右衛門ト云人アリ。後、檜林新五右衛門ト云人アリ。和蘭医方ヲ伝フ」と出ている。

(三) 貝原益軒の序、何れにしても、「紅夷外科宗伝」の益軒の序に「長崎人、得生軒檜林氏時敏丈人」としてあるが、時敏が、前述の「雑記」や「居家日記」にある「与えた字」であり、「得生軒」が「与えた軒号」であろう。

これらの記録から、益軒の序が、果して、「紅夷外科宗伝」の内容を知悉した上の序か、又著者の鎮山と益軒が親交あつての序か、甚だ疑わしい。

結局、益軒の序は、鎮山の門人を通じて本書の成立の由来は承知の上で、執筆したものと判断されうる。

「外科宗伝」序は「達則為良相窮則為良医」から始めて、本邦外科の由来を述べ、さらに紅夷外科の卓越性に触れ、「長崎人得生軒檜林氏時敏丈人者自妙齡嘗如医術折紅夷来客之善外治者師之学之不止一人、彼師授之、以口訳、伝之、以文字丈人素為紅夷之狹鞆、而受公養夙能通彼蕃語識彼国字、故聽其口訣読其文字而曉其術也、比之他人甚易矣、且覃思研慮、用心於此術、多歴年所焉」即ち、通詞（狹鞆）として和蘭人に交るうちに外科を知得した。今迄に依拠できる書物がないので、謬伝が多かった。そこで「丈人以此為憂於此著述於嘗所聞其師加之以平日所自得銳意輯録以為一書題紅夷外科宗伝焉」。この文によれば、パレ外科書の翻訳については一言も触れず、其師たちから聞いたところを主体とし、それに自家の経験したものを加えて、この本が輯録されたとしている。

「宝永丙戌九月朔且

筑前国貝原篤信書時年七十有七」

とある。

西玄哲の巻末に「右本書云ハ阿蘭人直伝秘書也」（前述）とある。

さらに、前記のように「紅夷外科書宗伝」の「金瘡跌撲療治之書」の巻から集録した手術図は伊良子家所蔵のもの、或

市は立神戸美術館蔵のものなど、今に尚、散見している。とくに神戸美術館のものは伝荒木如元筆という。そして巻末の前記吉雄幸朔永章の奥書は、紅夷外科をシンボライズした意味にとれる。即ち、楳林鎮山個人に関係なく、当時のオランダ医師から伝授されたものの象徴である。そして、著者の調べによれば益軒の序文は各書共全く同じで、異なった文章はない。

◎ 「外科宗伝」成立についての考按

以上を総合して、大胆な推定が許されるならば、本書は楳林鎮山のオランダ医師たちからうけた外科に関するものメモや筆記を整理し、それに自家経験を加えたものである。オランダ医師たちは教材としてパレ外科書の蘭訳本 (Carolus Batus) “De Chirurgie ende opera van alle de Werken van Mr. Ambroise Paré, 1649.” を奨めた。従って一部パレ本の内容と同一文章があっても、厳密にはパレ本の抄訳とはいえず、飽迄、パレ本と鎮山の間にはオランダ医師たちの介在を考えねばならない、と判断したい。

平戸、田平町在住の嵐山甫庵直系の嵐山二郎氏によれば、甫安 (甫庵) 自筆本の「紅夷外科宗伝」六冊、写本があったという。杏雨書屋蔵の六冊本は、全くこの系統のものである。嵐山甫安 (甫庵) は 寛永十年—元禄六年 一六三三—一六九三 といふ。慶安元年—正徳元年 一六四八—一七一 の人である。鎮山の「紅夷外科宗伝」は宝永丙戌 (一七〇六) に成ったもので、この時はすでに甫安の没後である。恐らく六代甫庵 (春生甫庵) であろう。何れにしても嵐山本は、現存の「外科宗伝」中、唯一の完本であるので、菅沼貞風氏の甫安説が出たのも、益軒の序を抜きにして考えれば当然であつたであろう。しかし、益軒の序によって、鎮山の作である。

問題は、金瘡の部分だけが、玄哲、光顕の諸家によって、夫々別に世に出ていることと、その図譜だけが広く一般に流布して、恰もオランダ外科を象徴しているが如き感を呈していることは、パレ外科書と鎮山の間には、オランダ医師たちの介在を無視して論ずることはできないからである。この点に関しては⑥ 関場氏の優れた考証と、研究がある。

### (3) パレ外科と前蘭学期外科

鎮山、玄哲、光顕が夫々同じ内容を盛ったヨーロッパ的外科書を著したが、とくに、その中の外科図は前蘭学期を象徴するものとして、以上の三者以外に吉雄耕牛も亦、之を採っている。止血法に結紮を紹介し、敢行の有無は別として、ヨーロッパ的な穿顱術を審さに見、整形外科領域に、ヨーロッパ的な脱臼の整復、骨折における大規模な副木装置の示唆、その他多くの外科的演技において、当時の日本外科に与えた影響は大きい。その外科図が現わす異常な *cosmetics* はその後にくくヨーロッパ的なものの受容に大きい役割を演じたことは、伊良子家所蔵の図巻や神戸市立美術館蔵の伝荒木如元筆の図巻等現存する、この種の図巻からも容易に想像しえられるところである。

パレ外科書の蘭訳本が現在<sup>⑩</sup>湮滅、又は<sup>⑪</sup>所在不明になって、数本を残すに過ぎないとしても、当時の外科者にとって、聖典のような存在であって、最初は蘭館各メイステルによって、次には、その介在なしに読れたことは、<sup>⑫</sup>諸家の文献によって明らかである。

労研本の“Opera chirurgica,” 1964によれば、全篇廿六章に分れ、第一章、外科の定義、第二——五章解剖、第六章以下外科各論であって、創傷治療の膏藥療法の整理、銃創有毒説を否定し、熱油注入法の廃止、四肢切断に<sup>⑬</sup>血管結紮法の敢行、頭部外傷(穿顱術の適応)脱腸帶義眼義肢その他の外科器械の創案及び産科領域の足位廻転術の実行の四項目の新しい開拓があったが、この中で従来の日本外科と全く異質な穿顱術、下肢切断術、血管結紮等が移し入れられたことはその後の日本外科展開に大きい示唆を与えた。そして、パレ外科書から七十二図の挿絵を採って前記三書は説明しているが、とくに下肢切断図<sup>⑭</sup>(第七十図)及上肢切断端処置図<sup>⑮</sup>(第四十二図)で夫々血管の処置を示したことは、最も日本外科技術史の上から<sup>⑯</sup>重要である。

#### 引用文献

① 菅沼貞風「大日本商業史」附録「平戸貿易志」一一七一—一一八頁。

② 武藤長平「西南交運史論」四九〇—四九四頁。

③ 関場不二彦「西医学東漸史話」上巻二四七—二八二頁。

古賀十二郎「西洋医術伝来史」一三六—一四五頁。

④ 岩熊哲「医史学論考」一六八—一八七頁。

⑤ 関場不二彦同上書、二七七—二八二頁。

⑥ 東京大学蔵、榑林本

伊良子家蔵、伊良子本。

⑦ 榑林家には明治廿四年夏頃迄家蔵、以後不明(旧東京帝国大学蔵と同一か)

⑧ 蘭館日記、一六六〇年二月二十八日、同年五月十六日の条参照。

尚、蘭訳本の渡来は万治三年(一六六〇)であると(板沢武雄著「日本とオランダ」一七九頁並に同教授より、その件に関する著者の質疑に対する回答私信による)

⑨ Hubers Klassiker der Medizin und der Naturwissenschaften Ambroise Paré—Rechtfertigung und Bericht über meine Reisen in verschiedene Orte”, 1963. S. 16.

⑩ 「外科宗伝」中の挿絵を便宜上、一連番号を附したのもの。

⑪ 阿知波五郎「日本近代外科学発達の性格」(日本科学史学会、関西支部大会)一九六〇年十一月十三日

⑫ 阿知波五郎「榑林鎮山と紅夷外科宗伝」(榑林鎮山先生三百五十年記念会)昭和三十六年十月二十二日。

#### (4) 長崎系外科とくに吉雄流外科

① 吉雄幸左衛門、諱は永章、号は耕牛、通称幸左衛門、後幸作と改め、さらに幸朔ともいった(享保九年—寛政十二年)この耕牛が展いた流派であることは、すでに有名である。

吉雄外科の特徴は、大槻如電の②「新撰洋学年表」に載っているように、それ迄の阿蘭陀外科が「耳聞面晤」の間を得

吉雄塾教程一覽表

(表第九)

教授項目

井上本

その他の資料

一、紅毛文字

瀨崎蘭学実習冊(一)

同 (二)

二、紅毛方言

西洋医言

阿蘭陀密印封帳記録

極伝巻木綿和解書

三、纏帛法

阿蘭陀流外療秘密之書(上)

四、切脉法

阿蘭陀流外療秘密之書

五、腹診法

阿蘭陀流外療秘密之書

六、服薬法

紅毛流油水薬之書

阿蘭陀和解雜方集

蘭療經驗名方聰書雜奇

阿蘭陀諸油取様之秘事

陣中船中治術書

蘭療名奇雜法録

七、刺鍼法

外療道具用法

服薬法教材重複

阿蘭陀流外療秘密之書

外療道具用法

阿蘭陀流疔之膏薬法

西遊隨筆記

紅毛流金瘡之書(永純)

六、七、八教義重複

一〇、整骨法

正骨術録

綱帯函巻(関場本)

紅毛巻木綿之書(京大本)

因液發備(京大本)

紅毛油薬之書(京大本)

阿暮天恵氣留(富士川本)

布欽吉徽毒論(富士川本)

紅毛秘事記(京大本、宗田本)

吉雄先生膏目(京大本)

紅毛膏方(京大本)

紅毛膏薬方(京大本)

吉雄家金創秘考(ツウンベルクロ伝富士川)

吉雄先生雜病伝(富士川本)

吉雄先生雜病伝(富士川本)

吉雄先生雜病伝(富士川本)

紅毛流瘍医鑑(平田本)

阿蘭陀瘍科之書(京大本)

正骨範(二宮彦可)

たものであるのに比し、耕牛のそれは、直接蘭書を讀、その疑問を蘭医に学んで獲得した点にある。従つて、前野良沢、杉田玄白の師たりえたし、当時六百余人の門人を持ち、吉雄流外科の栄えた所以である。

即ち、耕牛は前野良沢や杉田玄白の師であり、「解体新書」の序文を草している。その詳細は、<sup>⑧</sup>信じ難い記事が一部あるにしても、「蘭学事始」によく現れている。又、当時、ヨーロッパの事情に通じ、オランダの事物に通じている第一人者として、長崎を訪ねる人々はまず第一に耕牛を訪ねたことは<sup>⑨</sup>「江漢西遊日記」その<sup>⑩</sup>他を見ても明ら

かである。

このように吉雄流外科の特徴を知る賃料として、著者は先年日本医史学会総会に、伊賀藩井上貞重吉雄耕牛門留学資料を発表したが、さらに同資料を基として述べて見たい。

伊賀藩井上貞重が寛政十年十月から同十二年三月に亘る間、長崎の吉雄耕牛塾に入門、その留学当時筆記しえた資料二十八冊、他に寛政十二年、「崎陽出役用向留書」。寛政十二年「寛政崎陽舶来荷物語」がある。

本資料は耕牛の死の直前のものであって、耕牛が講じた課程内容をすべて含んでいるものと考えられる。内第二十四冊巻末に免許証写（寛政十二年三月）があり、全課程は約二ヶ年間で終るものと推定せられる。◎紅毛文字、紅毛方言の教程があつて、蘭語の基礎を教え、纏帛法、刺鍼法、治療法、療瘍法、整骨法等の外科部門が主な教程である。（表第九参照）

資料内容は、

1 滞崎蘭学実習冊（上）

2、同（下）

3、西洋医言

4、阿蘭陀密印封帳記録

5、極伝巻木棉和解書

6、阿蘭陀流外療秘密之書（上）

7、同（下）

8、阿蘭陀流疵之膏薬法

9、紅毛流油水薬之書

10、阿蘭陀和解雜方集

- 11、蘭療經驗各方聰書雜奇
- 12、阿蘭陀諸草油取様之秘事
- 13、陣中船中治術書
- 14、蘭療名奇雜法録
- 15、外療道具用方
- 16、西遊隨筆記
- 17、紅毛流金瘡之書
- 18、カスパル流膏藥方書
- 19、白丹砂製煉方
- 20、阿蘭陀膏藥煉書
- 21、同
- 22、阿蘭陀流秘伝、ヨ、リヨムロール方書
- 23、阿蘭陀流秘伝、エンブラース方書
- 24、阿蘭陀流秘伝、イムクエムキ方書及耕牛の貞重に与えた免許写
- 25、栗崎流金瘡書
- 26、南蛮流栗崎金瘡本末撰奇
- 27、吉益氏方記
- 28、正骨術録

今、同資料に記された年月表を見るに

紅毛流油水藥之書

寛政10年10月



西遊隨筆記 同 10年霜月上旬

紅毛流金瘡之書 同 10年霜月下旬

栗崎流本末撰奇 同 10年冬霜月

吉雄耕先生阿蘭和解雜方集 同 10年初冬

外療道具用方 同 11年春3月

極伝卷木綿和解書 同 11年春3月

吉益氏方記 同 11年蠟月

經驗各方聰書雜奇 同 11年霜月

和蘭流膏藥伊牟久恵牟杵方書

寛政11年3月

(耕牛は寛政十二年八月十六日逝去。仍て最後の方書は耕牛の死の五ヶ月前のものである)。

以上のうち、とくに問題になるのは、本資料が果して耕牛の講義の筆記なのか、又は井上貞重が長崎に留学中、参考の爲め、耕牛門とは無関係に、個人の参考資料としての謄写になるものか不明である点である。今、前記井上本のうち吉雄流以外の他流と想像されるものを挙げれば、

1 栗崎流金瘡書一冊(「金創秘訣」上下二巻の臚本、頭部以下金創部位十一編)

2、南蛮流栗崎金瘡本末撰奇一冊(栗崎家五徳と栗崎家師語録以下二十目)

3、白丹砂製煉方一冊(養拙齋識)

4、カスハル流膏藥煉法・カスハル流諸藥製法(長崎本河氏家秘方)一冊

5、吉益氏方記一冊「吉益半笑齋「換骨秘録」ノ抄本)

6、三和流金瘡書(紅毛流金瘡之書中ニ別記、他ニ吉田流ノ名ガ見エル)

7、紅毛的伝金創書〔阿蘭陀流外療秘密書〕中ニ記載、尚「外療秘密書」ハメストル、ステイヒンノモノデ他流混入ガ多イ)

8、阿蘭陀外科(吉永升庵「阿蘭陀外科正伝」ヨリ抄出)

9、普婆經ノ説〔阿蘭陀流疵之膏藥法〕中ニ見ル)

10、正骨術録一冊(目次ヲ見ルト杏陰齋正骨要訳目次トアツテ、二宮彦可ノ「正骨範」乾坤二冊ト酷似スル)

以上、井上本には檜林流以外の諸流が混入している。そして、井上貞重が参考のための個人の謄写なるか、吉雄塾の教程筆記なるか不明である。しかし、全般を通じての調査の結果は、耕牛が、それ迄の通詞外科の集大成者であることに誤りがない。

資料(井上本)に現われた外科病名を挙げれば

1、創傷 刀創、銃創(玉疵、鉄砲疵、火傷凍傷(附、ひび)

2、創傷合併症 出血、創痛、異物(玉ぬき)、外傷譫妄症

3、全身病 脚氣、癩癩、全身感染症(陰症)

4、感染症 水腫、丹毒、化膿性感染症(陽症)、咬創(狂犬病ヲ含ム)、破傷風(牙関緊急)、結核(瘰癧ヲ含ム)、梅毒、鼠咬傷、蛇咬症、虫類刺創

5、腫瘍 良性腫瘍(瘤)、蝦蟆腫、鼻茸(鼻竹)、悪性腫瘍(岩)、風棘、血管腫(血腫)、気腫、瘰腫

6、皮膚 痘瘡、癩、癰、疔、下疳、梅毒、象皮病、色素斑、癩風、鱗屑疾(鴛膏風)

7、畸形 兔唇、贅指、銷肛、銷陰

8、骨折、脱臼 各部位骨折、脱臼

9、肛門 痔核、痔瘻、肛門輝裂、脱肛

病名の記載には場家、金創医の古い表現から、蘭語、ラテン語そのままのものまで区々であるが、創以外に二次感染症

の記載が詳細である点と腫瘍に良性と悪性を分け、岩（癌）の記載があること、畸形に兎唇、贅指以外に銷肛、銷陰が見られることは一進歩といつてよい。即ち外科病名分類に、素朴ではあるが、体系が樹立している。これは②ハイステルやブレンキらの著書に早く接していた耕牛の当然な結果である。

問題は耕牛が直接いかなる外科治法を行ったかである。

石崎融思著「長崎古今集覽」附録名勝図絵には「阿蘭陀屋敷外科医の治療」（前膊切断図）があり、「長崎紀聞」、乾の冊に、「阿蘭陀外科ウデ切之図」が載っている。とくに前図には通詞が立合っている。勿論石崎融思は弘化三年二月に歿しているし（長崎尽人伝）、「長崎紀聞」は文化頃の作である。従つて耕牛時代とはかなりの距りが見られる。

しかし、独嘯庵の⑧「漫遊雜記」には「乳岩不治、自古然而和蘭書中有言、曰其初発如梅核之時、以快刀割之、後從金瘡之法治之、斯言有味雖余未試之、書以告後人」とある。「漫遊雜記」は宝曆十三年夏に撰せられたのであるが、独嘯庵の西遊はその前年の宝曆壬午十二年のことで⑨同書中に「余西游列長崎、就訳師吉雄氏」とあるように耕牛のところで、その所持の蘭書を見て前記の記事をなしたものと考えられる。新宮涼庭の「西遊日記」巻之一、二十六丁裏に「文化十二年正月、在献作氏之楼」とあり献作は吉雄耕牛の長子幸太郎である。涼庭は吉雄権之助（耕牛の妾の子）を六次郎と呼んだ。西遊日記に「六次郎先生号如洩、後称権之介、耕作末子其解横文天下無比」とある。涼庭は、この如洩に就いた。又同「日記」には蘭館甲長道富之妓の妹に「齒齲生肉塊」大さは胡桃大で破裂出血した⑩治療症例が載っている。「水蟹腫」と診断し、結紮して烙鉄で之を熨して治癒せしめている。つまり耕牛の次の時代の治療法の一端である。

又、橘南谿の⑪「外科小備」には「阿蘭人ホントクウハ乳岩ヲ見テ結核ヲ切り取り、跡ヲ金瘡療治ニセント云、是ハ妙ナル療法ナレトモ名人ニ非レハ出来難キ事ナリ」とあるのは余りにも知り過ぎてゐる。文化三年の歿（七十歳）であるから、時代は略々一致する。

耕牛の手術記事は見当らない。ただ、「西遊隨筆記」、「外療道具用方」を以て推測し得るにとどめる。同書から外科器械を挙げれば

- 1、三方切、四方切、要用道具（頭部骨折用）
- 2、頭脳骨折クホメ、クダケタル療治（陥凶骨折用）
- 3、ホンタネル道具（泉門穿顱用）
- 4、テレハーン（骨瘤テ難治之時用ウ）
- 5、<sup>⑩</sup>セイトンナールト（バレ時代にも用いられた。頂部に左右から針を通す。一種の刺戟療法であり、ハイステルにも出ている。本書には、その用方を図示し、「眼病或ソコヒノ療治ナリ」と附記している。
- 6、眼中ニ掛タルマク切道具
- 7、ヨーコカンカルト云眼病ニ用ユル道具
- 8、眼中ニ物之入テ、不出時用フル道具
- 9、ハーセモント（兎唇用具）
- 10、カンカルテルリッコニ用道具
- 11、ホレイヒス（鼻腔ポリープ）
- 12、水腫水抜タル後、臍腫物ニ用ル道具（腹腔穿刺、臍腫瘍除去）
- 13、鉄砲玉貫道具（銃丸除去器）
- 14、尺沢血ヲ時時備置道具（瀉血用具）
- 15、フルートステルフ（止血具）
- 16、手足切離ス道具（四肢切断具）
- 17、骨或指切離ス道具、
- 18 指之水カキヲ切離ス道具（胼指切除具）
- 19、爪皮内肉之中ニ入タルヲ切離ス道具

20、㉔ 要用道具（ランセタ、レキトシカール（直鋏）以下十五種）

㉕ b メイチャ、置木綿部直銃

㉖ c 外科道具

㉗ d 止血具（トルネケット）

㉘ e 眼、頭腦ノ道具（主トシテ陥凹骨折用）

㉙ f 骨折治療具（劃子、副木、索引具）

「外療道具用方」には吉雄永章先生秘伝とあって、当時一般に慣用手術の用具と判断される。従って、実際行われたのは、前述のように、手術を約二十種と見なすことが出来る。何れも現今の小外科乃至救急手術の域をこえていない。四肢切断術前膊、下腿以下が敢行されたことは疑ない。しかし、これも外傷による挫滅創の四肢の損傷に限られていたと判断される。又、「手足切離ス道具」とあるところから見て、四肢切断術も、一般には腕関節、足関節以下の切断であろう。切断血管の処置はヲレイフヂウエイセロノトフとあるから、圧迫ボタンを以て断端を圧するか、カムテリインプロトエソケレイン、烙鉄を使用して処置したものである。フルートステルフ、止血の項には「兎之毛」のメイチャを局処に撒布し、油紙（生すきの柔軟なるものセレートハヒイル）を以て包む。血止具とあって、器具の詳細の記載がないが、トルネケット及びタンカ（鉗子）は使用した。

頭部の手術は外傷による陥凹骨折等の治療にとどまり、鎮山の「外科宗伝」や光頭の「外科訓蒙図彙」にある穿顱術は実際には敢行されていなかったと見るのが正しい。

さらに「阿蘭陀流外療秘密之書」上下二冊、「紅毛流金瘡之書」、「蘭療各奇雑法録」、「陣中船中治術書」の井上本の他に、「吉雄家外療書」写本、耕牛門人光竜平藏筆写（富士川本）、「吉雄家金創秘書」写本（富士川本）、「吉雄先生雑伝書」写本（一名トウンベルクロ伝）（富士川本）、「ウラントブック」写本（富士川本）、「吉雄先生雑病伝」写本（京大）（富士川本）を綜合すると観血手術は次のようである。

1、頭部損傷（頭蓋骨折、陥凹骨折を含む）「西遊隨筆記」副木装用の図示がある。

2、兎唇成形術、(「西遊隨筆記」に図示がある)

3、鼻ポリープ、良性腫瘍摘出(図示)。

4、胸腔穿刺

5、腹部外傷(腸管縫合)

6、四肢切断(腕関節、足関節以下が主で、他は挫減創か) 附、血管縫合及トルネケット使用

7、銷陰、銷肛、諸種肛門手術

8、腫瘍切除(乳癌手術については耕牛関係の資料からは得られなかった)

その他、井上本「極伝巻木棉和解毒」及び「吉雄流巻木棉図巻」巻子 布施玄治氏藏 巻末に耕牛像と Grondig bericht van de

verbanden behelzende Eene Naauw Keurige Beschrijving alle uijwendige Gebreken en heekundige handgrepen Naar de nieuwste en beste Wijze Sierlijk om Gemakelijk te verbinden J. S. W. koak. —「このさややかな記録は、すべての外症によつて起る機能上の不自由や治術上の手技をおぎなつて、新しく、立派にそして自由自在に包帯するように教えている。

吉雄耕牛」の一文が附記してある)を見ると、これはハイステルの図録から採つたものであることがわかる。そして、その取捨撰択は実地に繁用されるもののみである。

耕牛は当時来朝したパウエル Rudolf Bauer やトウンベルク Karl Peter Thunberg に教えを受けたことは前記資料から明らかであり、又「阿蘭陀流外療秘密之書」の上冊には「メストル、ステイビン療治指南並薬方記」がある。ステイビン Steven 来朝は延宝元年 一六七三(又は二年ともいう)で、時代が耕牛時代と相違する。このように、耕牛関係写本には他流の混流が著しく、エンブラス方書、イムクエムキ方書、膏薬煉書類に現われた処方は長崎系外科の綜合、集大成の觀を呈する。

要するに耕牛外科はハイステル、プレんキの外科を採つて、その時代の最新知識であり、従来の「耳聞面晤」の外科から一步前進した良識であり、江戸蘭学期を誘導した意義は特記しなければならない点である。沼田次郎氏も耕牛を⑥「海外知識の供給者」とされ、「蘭学者はもちろ、例えば三浦梅園、司馬江漢、平賀源内、橋南溪、平沢元愷、林子平、近藤

重蔵等々、各方面の文人、学者と交際があり」とされた。外科史においても、長崎系外科から江戸系外科の有力な橋渡しの役をつとめたことが最も意義がある。

#### 引用文献

- ① 「長崎県人物伝」六七七頁
- ② 大槻如電修「新撰洋学年表」八五頁
- ③ 古賀十二郎著「長崎と海外文化」下編二頁及び緒方富雄著「蘭学事始」（好学社）一六〇頁
- ④ 黒田源次・山鹿誠之助校註「江漢西遊日記」一〇〇頁（天明八年十月二十日）一〇八頁（天明八年十月二十五日）一二二頁（天明八年十一月十二日）
- ⑤ 永富独嘯庵「漫遊雜記」及び三浦梅園「帰山録」
- ⑥ 古賀十二郎著「西洋医術伝来史」一六八—一六九頁  
「吉雄幸作より美濃高須藩医野村立栄に与えた授、吉雄家学之秘条」参照
- ⑦ 古賀十二郎著「西洋医術伝来史」一七〇—一九三頁
- ⑧ 永富独嘯庵、富士川游訳「解漫遊雜記」三三頁  
同書六二頁
- ⑨ 新宮涼庭「西遊日記」二九丁表
- ⑩ 橋南谿「外科小備」写本十五丁表
- ⑪ William Brocbank: "Ancient Therapeutic Arts," 1954. pp. 107—108.
- ⑫ 耕牛逝去三年前ニ筆記セル旨註記アリ
- ⑬ 沼田次郎著「洋学伝来の歴史」（至文堂）五〇頁

## 日本科学技術史大系第24巻 医学1

五八〇頁におよぶ大冊は九章にわかれる本文と、序章に総説、終章に展望、そして附録に衛生局報告を収め、年表と索引を加えた大資料集である。大阪大学の丸山教授と中川助教を中心とする医学史研究会が五年間の日子をかけて収集した六十キロをこえる大量の複写資料（重量で示したが枚数にすれば天文学的数字となろう）の中から、一八四八年（嘉永元年）の牛痘苗渡来より一九一〇年（明治四三年）にいたる五二年間の医事の問題点となる資料を、各個に解説を加えてテーマ別に配列してある。

本書の最も特色とする点は「医学」を広義に解して「保健に関する科学と技術」というや観点に立ち、およそ保健に関するあらゆる分野の基本資料をほとんど網羅していることであろう。しかも各章のはじめに、社会の動向に関連した医事を概説し、問題点が世界医学史といかなるつながりがあるかを意識して述べ、関係資料をさがすためのリストまで添えられている。したがって上古いらい一千年におよぶわが国の伝統医学が、封建の殻を破って真に民衆のものとなり、さらに世界医学に連なる激動期の五十年間を、手にとるように実物によってキャッチ出来るのでまことに有難い。

わが国の医学史を研究するための基本図書としては、古典的名著の富士川游の「日本医学史」があり、また近年では各分科の専門家の分担執筆による学士院編「明治前日本医学史五巻」があるが、両書とも明治期にはそれほど比重をかけていない。これは通史であるから当然としても、江戸中期前の

医学は文献資料がほとんど限定され、ちょっと努力すれば貴重書であっても岩波の「図書総目録」などによって所在が判明し、利用はそれほど困難ではない。ところが明治期となると全く事情が違ってくる。資料が多すぎ、どこにあるかを調べるだけでも至難のうえ、いままでも案外粗末に扱われていたためか、また雑誌や小冊の多いせいか、医学史にとってはジャンルであった。それがこのように整備された資料集として解説や手びきまで加えられて提供されたことは、学界の慶事といわなければならない。

本書の利用価値はほとんど無限といつてよい。保健に関するあらゆる領域での問題点が要領よくまとめられているからである。たとえば農村における医療の史的展望、近代における救療事業、看護の発達、外国医学受容の態度などダイナミックなテーマをいくらかでも埋蔵しているから、この一冊を精読して冷静な批判をめぐらせば卒業論文でいどのものなら何編でも生れよう。

医事、保健に携わる人々だけでなく、人文科学系の研究者にとっても必須の文献である。明治期の社会の実態を知るための基本図書として広くすいせんするものである。

編集と校正には大変な努力と周到な用意がなされたと思うが、若干のミスプリントや脱落があるのは止むを得まい。いづれは追加訂正がなされると思う。大正昭和期は「医学2」として続刊される筈であるが、完成の暁は現代史の、そして日本医学史の重要不可欠の文献となることであろう。（日本科学史学会編、日本科学技術史大系24、医学1、第一法規出版株式会社判五八〇頁、三、五〇〇円）〔石原〕



# 『蘭学事始』福沢本の筆者

富田正文

私はさきに昭和二十五年十月「史学」(第廿四卷第二・三号)に、「和蘭事始と蘭学事始―福沢家所蔵の一写本について―」と題して、昭和二十四年秋、福沢家から慶応義塾に寄託された福沢諭吉関係遺物約一千六百点中に存した「蘭学事始」写本について紹介するところがあつた。

この写本(福沢本)の価値が、明治二年の板本に、もっとも密接なつながりを示す形態をそなえていること、福沢がみずから数カ所に書き込みをしていること、そして福沢がみずからの筆で、写本の「和蘭事始」という表題を「蘭学事始」と訂正した跡が示されていることなどに存することとは、すでに周知である。

ところでさきの報文において、私は福沢本の上段欄外の書き入れのことに触れて、こう書いた。

「上段欄外に数カ所の書き入れがあるが、写本の筆者と同

一筆跡と見られるのは一箇所だけ、他はすべて福沢の筆跡である」

その一カ所というのは「一とせ甲比丹は『ヤン・カラン』外科は『バブル』といふもの来りし事あり」とあるところで、全文は左の通り記してある。

「和蘭官名表を案ずるに

『ヤンカランズ』は千七百六十六年即ち我明和三年に一年在留し後一年を隔て千七百六十八年に再び来りて二年間在留す即我明和五六の二年也恪考」

さきに報文を書いた当時、私にはこの書き込みの筆者「恪」の見当がつかなかったので、深入りするのをひかえた。そのうち、神田孝平の名が孟恪であることを知ったのであるが、他事にまぎれて、これを追加報告するのをおこ

たっていた。

最近、緒方富雄東大名誉教授から、この点を指摘した御手紙をいただき、この筆者が本文の筆者と同一であることは疑いない以上、もし「恪」なる人物が判明すれば、本文の筆者もその人だということになるが、これについて私にその後の考証があるかというおたずねである。

私は、記入の「恪考」の「恪」は神田孝平とおもわれると御返事し、あわせて、これにもとずいた多少の推定をつけ加えた。

緒方名誉教授から折返しお手紙があつて、問題の上段記入者が神田孝平であつて、本文も神田孝平であるということになれば、非常に興味が大きい、福沢本の上段記入者の筆跡がはたして神田孝平のものであるかどうかを確認してあるかという御質問である。後述するように、当時私は病臥入院中であつたので、神田孝平の筆跡をよく知らない私には、あれが神田の直筆か、側近の書生の書写か確実に申し兼ねること、もし先生のお手もとでそれを一応調べていただければありがたいことを申しあげた。福沢などの側では、自分の原稿は多くは側近の書生に写本をつくらせるのが多く、あとで自分で目を通して誤脱を修正加筆する

というのが普通であつた。

緒方教授は、早速国立国会図書館憲政史料室に保存されている神田孝平の二十数通の手紙をくわしく調べ、とくに明治六年の手紙の筆蹟と注意深く比較検討せられた結果、福沢本の筆者は、まごうことなく神田孝平の筆であるとは断言できないという結論に達せられた。同一人の筆跡でも、大字と小字、手紙と書写などと条件によってかなりちがった字を書く人があるからである。これについて断定的なことをいうためには、もっと多くの筆跡を調べる必要があるとのことで、当分保留という立場をとっていられる。

これによって考えると、神田孝平（一八三〇—一八九八）が明治直前に本郷湯島の聖堂裏の露店で発見し買求めた写本が、そのまた写本の上段欄外に、神田孝平が、上述のヤンカランスの日本在留の年代に関する、自身の考察を記入したものであろう。「和蘭官名表」を案ずるところなど、当時蕃書調所の職員であつた神田にふさわしいこととおもわれる。

ところで、福沢本は、現在までの調査の段階では、神田孝平が欄外記入した「事始」を、そっくりそのまま、全体を誰かが写本したものであろうというよりほかになさそうであ

る。したがって、福沢本の筆者は、いまなお不明であるといわざるをえないが、上段欄外の記入の原筆者が神田孝平であることはたしかである。

さきの報文でも指摘したように、明治二年本の内容は、福沢本と同一ではない。福沢本に脱落していて、明治二年本に入っているところがあるし、漢字や仮名の使い方も同じでないものもすくなくない。それにしても福沢本を底本としたと考えられない相異がある。

もっとも明治二年本にしても、刊行までの過程において、書き写しの誤や、訂正のあったことも考慮にいれなければならぬ。

明治二年本の底本は、福沢本から、別につくられた写本を、いま一度、神田孝平の発見した古写本と校合し、それにさらに福沢が読みやすいように加筆修正したものであったと考えられる。

明治二年本は木板刷であるから、この底本から、板木を彫るための板下がつくられなければならない。だから、底本から板下ができるまでのあいだに、もう一つの段階がある。

明治初年のころは、古文献に対する観念も現在のように

厳格なものでなく、写本するものも、校合するものも、かなり自由に自分の主観によって、加筆修正しているから、同一の底本から写本されても、それが誤写、脱落以外の相異を含むこととなる。

福沢が、原題の「和蘭事始」を「蘭学事始」と改めたのにも、このような心理がはたらいていたとおもわれる。

緒方名誉教授との今回の通信のあいだ、私は病氣入院中で、堪えがたい苦痛になやまされていた。教授は、このことを一日も早く発表するようにとの激励のことばをいただいたばかりでなく、私が原稿執筆にも不自由なのを知り、私の差上げた通信にもとづいて、みずから原稿をまとめ、私の意になうよう、自由に訂正して発表するようにと、厚意あるおすすめを受けた。私は、教授がこの問題をそれほどに重要視していられるのを知り、教授の御厚意にあまえざるを得ない。

ここに緒方名誉教授に深甚の謝意を表して、発表させていただく次第である。

(本論文の要旨は、昭和四十年六月二十六日日本医史学会例会において、緒方富雄名誉教授によって代演せられた)

# 日本医史学会例会記事

十一月例会は左記の要項により行なわれた。

日時 十一月二十日(土) 午後二時—五時

場所 慶応大学医学部北里記念医学図書館第一会議室

講演 一、関川関所趾にウイリスの跡を訪ねて 鮫島 近二氏

一、後水尾院の長寿について 羽倉 敬尚氏

一、謡曲「朱丹溪」の発見 石原 明氏

第一席の鮫島氏の講演は、ウイリスが明治維新に際し、北陸地方へ赴いた途次、関川関所を通過したことがあったので、今夏その現地を訪ねられた模様について述べられた。その現地は今日の信越線の田口駅で下車、池の平といわれているところの傍で、関川関所趾と記してある立て札があるほかは何もないそうである。関所趾とあるのでさぞかし要害堅固な所であろうと考えられるのに今はただ平坦な場所である。ウイリスはこの関所を通過した時にその役人から帽子をとれといわれたことから一悶着を起したことをその手記のなかに述べているとのことである。しかし現在はこの関所のことを知っている土地の故老もいない由である。

第二席の羽倉氏の講演「後水尾院の長寿について」は第百八代

の天皇後水尾天皇がその当時としては類の少ない八十五歳の長寿を保たれた原因と思われるものを挙げ、結局、平素の摂生のよかつた故であるとして、いくつかの事例を述べて説明された。

第三席の謡曲「朱丹溪」の発見は、石原明氏が最近入手された「朱丹桂」と題する謡本について考証、説明されたものである。

同書は朱丹溪の診療についてこれを謡曲化したものであることは

確かで、今は廃曲となってしまったようであるが、珍本というべきものであろう。

出席者(敬称略)

石原 明 大鳥蘭三郎 馬場 明 小川 鼎三 内山 孝一  
羽倉 敬尚 鮫島 近二 大東 昭雄 本間 達雄 福島 博  
久志本常孝 岸本 頼子 佐藤文比古

十二月例会は恒例により蘭学資料研究会と合同、左記の次第により開催された。

日時 十二月十八日(土) 午後二時—五時

会場 中央区銀座東四丁目 七十七銀行ビル会議室

演題 一、嘉永年間の西洋砲術上曾根金三郎の周辺

一、蘭方初期薬物学の分類 日大学院 笹原 一 晃氏

一、蘭方初期薬物学の分類 明治薬大 佐藤 文比古氏

一、レーウエンフックの顕微鏡展示と解説

一、緒方洪庵「虎猜痢治準」補遺

緒方 富雄氏

講演終了後同所で例年の通り両会合同の忘年懇親会を開いた。

出席者(敬称略)

岸本 頼子 小川 鼎三 大鳥蘭三郎 緒方 富雄 関根 正雄  
福島 博 佐藤文比古 久志本常孝 安芸 基雄 新井 正治  
片桐 一男 大東 昭雄 松村 明 石原 明 谷津 三雄  
川畑 紀義(以上16名)

昭和三十九年五月以降新入会者氏名

- |                       |                    |
|-----------------------|--------------------|
| 監田 俊郎 (愛知・常滑市)        | 武田 充弘 (日大・歯学)      |
| 石橋 直 (日大・歯学)          | 津山 直一 (東大・整形外科)    |
| 稲坂 謙三 (石川・加賀市・内科)     | 戸刈近太郎 (名古屋大名誉教授)   |
| 岩治 勇一 (福井・医史学)        | 豊倉 康夫 (東大・脳研・神経内科) |
| 岩瀬 敏司 (愛知・岡崎市)        | 永坂 三夫 (愛知県立愛知病院)   |
| 岡田 靖雄 (東京・松沢病院)       | 中西 賢況 (東京・小山病院・内科) |
| 小野 公義 (岡山大・皮膚科)       | 野村 拓 (阪大・衛生)       |
| 大東 昭雄 (埼玉・所沢市)        | 林 正秀 ( )           |
| 角田 信三 (名古屋・中日病院々長)    | 日比野 進 (名古屋大・第一内科)  |
| 片桐 一男 (東京・蘭学史)        | 藤森 速水 (大阪市大・産婦人科)  |
| 上谷 秀和 (富山・新湊市)        | 堀部 真広 (東京医大・薬理)    |
| 川島 恂二 (茨城・古河市・眼科)     | 松田 武 (阪大・衛生)       |
| 岸本 頼子 (東京・至誠会第二病院・外科) | 宮本 忠雄 (埼玉・草加市)     |
| 桑原 寛一 (愛媛・松山市)        | 森 優 (九大・解剖)        |
| 小泉 衡平 (福島・須賀川市)       | 毛利 孝一 (愛知・名古屋大)    |
| 小島正三郎 (東京・八王子市)       | 矢数 圭堂 (東京医大・薬理)    |
| 越島新三郎 (東京・国立第一病院・神経科) | 谷津 三雄 (日大・歯学)      |
| 佐々木仁一 (山形・山形市)        | 山城 正之 (阪大・衛生)      |
| 塩沢 香 (東京・医学通信社主宰)     | 山本成之助 (新潟・相川保健所長)  |
| 鈴木 勝 (日大・歯学部長)        | 米田 賀子 (徳島・阿南市)     |
| 鈴木 鑑 (東大・血清学)         |                    |
| 添田紀三郎 (高知・高知市・泌尿器科)   |                    |

編集後記

本年最終号をお送りします。  
 本誌の発行おくれを取り戻すべく先月に引き続き誌の編集につとめた。本学会の発展には会員数の増加が何より必要であり、それには学会誌の定期的な刊行が何よりも大事なことである。このことはよく承知していたのであるが、いろいろな事情から実現しなかった。会員諸兄に深く陳謝上げると共に来年からはなお一層の努力を惜しまないつもりでいるので会員各位の一段の御協力、御後援をお願いする。次号からは内容の充実をはかるために、たとえば文献欄を復活し、研究者の便に供したい所存です。何分ともによるしくお願ひします。

(大鳥)

regarded as alien to the teachings of modern medicine. By endeavoring to coalesce Western and Eastern medical knowledge for the further improvement of the welfare of mankind, Japanese doctors and researcher workers are making a significant contribution towards the establishment of a new and more effective system of medical science.

(Broadcast date : February 15, 1965 by N. H. K's "speaking of Japan.")

after Japan became a modern state, medical treatment was quickly modernized, and treatment of patients moved from the home to the hospital. But the social standing of women remained unequal, and it is not difficult to imagine in what light nurses were first regarded by the general public.

The new hospitals had to employ untrained widows or destitute women as nurses. Then, in 1884, two American nurses, Toole and Reed, were invited to Japan to train the Japanese women in nursing methods. Later, more foreign nurses came to Japan to teach at various nursing schools. They endeavored to instil the lofty spirit of Florence Nightingale into the responsive Japanese nurses.

The level of medical science in any country is said to be based on the existing system of medical care, the knowledge skill of those engaged in the medical profession and the medical knowledge of the people in general. Japan is at present in the transitional stage of moving forward to a system of complete medical care. While we may look forward to this day, let us see how the country is training its doctors.

Germany was adopted as a model a century ago, but the German teaching methods were gradually revised to suit local conditions. At the end of World War II, the German system was replaced by American system.

There are now in Japan 46 medical colleges and 9 dental colleges, and approximately 100,000 doctors. The nursing system was also americanized after the war and are trained at the university level. Medical knowledge among the people has risen considerably, but it is felt that the achievements of research by specialists should be more directly linked to the people.

While the period of 30 years after 1868 may be described as being the stormiest in the history of Japanese medicine, medical science itself has provided the world with an age on miracles in the past 100 years. The successes scored in Japan may be attributed to the inborn characteristics of the nation, but what should not be overlooked is the fact that the basis for the revolutionary achievements laid over 1,500 years ago when Japan began to depend on Chinese medicine. It was this storehouse of knowledge and experience that generated progress in the modern age of medicine. The future responsibilities of Japan's men of medical science include not only their contributions to the world of modern medical science but also scientific exposition of ancient indigenous Eastern medical knowledge,

Active research relating to artificial cancer was carried out in great earnest in Japan, in 1932 Takaoki Sasaki, Tomizo Yoshida, and others artificially produced liver cancer mice. Cancer research still continues actively in Japanese medical circles.

The contributions by Japanese in the field of pharmacology over the past century have been noteworthy. Of world importance was the success of Nagayoshi Nagai in 1888 in extracting an alkaloid called ephedrine a success which turned the eyes of the medical profession throughout the world on Japan. This material, a component contained in herbs long used in China, was also synthetically produced by Nagai 1909. It has now become an indispensable medicine.

Jokichi Takamine, while studying in the United States, discovered in 1900 the adrenalin of the adrenal hormone, and Umetaro Suzuki, also in the United States, succeeded in extracting the substance known as oryzanin. This was later renamed vitamin and classified as B, a pioneer in vitamino-logy. In this field, in 1924, Katsumi Takahashi isolated Vitamin A and determined its structural formula. It is interesting to note that the Japanese been pioneers in both vitamin A and vitamin B research.

Component research on herb medicine, which is indigenous to the Orient, has more or less been a monopoly of Japanese medicine. Many of the herbs are now used in modern medicine.

On the other hand, the postwar introduction of streptomycin, an anti-tubercular medicine, has, despite some side effects, succeeded in decreasing the death rate from tuberculosis by 73 per cent between the years 1847 to 1955, thus prolonging the average life span of the Japanese. In 1957, professor Hamao Umezawa of Tokyo University discovered and produced a new antibiotic, kanamycin, which has since been exported overseas.

At present the Japanese medical profession is facing a critical situation, but nursing, one of the outstanding factors in medical care, is at a high level, notwithstanding the fact the working conditions are less favorable than those existing in the advanced countries of the West situation, What are some of the reasons for this high level in the Japanese nursing profession?

From days of old, care for the sick and aged has been taught in Japan as a part of Buddhist morality within the family circle. From 1868 onwards,



Kruse at an international medical meeting. After the debate, the committee decided to call the bacillus the Shiga-Kruse bacillus. Later a different type of dysentery bacillus was discovered. In 1903 two more types were added by the Kenzo Futaki group. To honor the great achievements of Dr. Shiga in classifying the bacilli, the generic name of *Shigella* is added to all dysentery bacilli.

Shiga also studied under the famous Dr. Ehrlich. In 1904, he discovered that synthetic trypanrot affected the special pathogenic organ. This was the first step in chemotherapy.

Hideyo Noguchi who was born in 1876 and died in 1928 was a self-educated doctor. In 1898 he realized his lifelong ambition of working in a communicable disease research institute as an assistant, and came into contact with Kitasato. It is a coincidence that among his colleagues was Sahachiro Hata, who was to later join Dr. Ehrlich in producing or the so-called No. 606, a specific for spirochaete.

Noguchi who went to America scored great achievements in the Rockefeller Institute. In 1911, he improved the method of cultivating syphillis spirochaete, and in 1913, with the confirmation of the pathogenic organ of degenerate syphillis, Noguchi's fame spread throughout the world. From 1918 he was absorbed in Yellow Fever research, but in 1928 he passed away in the interior of Africa after contracting the disease. For his many accomplishments in the world of medical science and for his heroic death, he is still respected by peoples of many nations.

Only 80 years have passed since Ogata started the study of bacteriology in Japan, but the achievements of the Japanese have received international recognition.

An important medical theme of the 20th Century has been the true nature of cancer. The German pathologist Rudolf Virchow was quick to support the theory of stimulation, but no country was able to produce experimental proof of this theory.

However, Katsusaburo Yamagiwa, Professor of pathology at the Tokyo University, who was born in 1863, jointly with Koichi Ichikawa succeeded in the artificial growth of cancer by applying tar to the ear of a rabbit. When this result was announced in 1915, it confirmed the Virchow theory.

against the deadly disease. This method was, indeed, the forerunner of the present sero-therapy.

Among Ogata's students was Shibasaburo Kitasato, who later studied bacteriology under the world famous Robert Koch. Kitasato amazed the world in 1889 by cultivating the tetanus bacilli. This bacillus was discovered five years earlier, but because it had the characteristic of not growing in the presence of oxygen, it was hitherto impossible to obtain a pure culture. Kitasato's method, however, made it possible to purely cultivate all similar bacilli, opening up a wider field of research.

This initial success did not satisfy Kitasato. He obtained toxin, injected it into animals to build up immunity, and from the blood of the animals extracted a new matter in the form of antitoxin. He carried out a tireless research into the treatment of diseases. In 1890 he was successful in detecting the diphtheria bacillus, in the following year in achieving tetanus immunity and in making antitoxin. These accomplishments not only made sero-therapy possible, but also contributed towards sharply reducing the death rate from many dreaded diseases.

While Kitasato was assisting Koch in tuberculosis bacilli research, the Japanese government strongly urged him to return home. On returning to Japan in 1892, he found to his disappointment, that, owing to the lack of sufficient government funds, his research was seriously handicapped. With the help of private contributions, he was finally able to set up a research institute where he trained a number of promising medical students. This laboratory was later to become the Kitasato Research Institute and the Medical Department of Keio University.

The Tokyo University laboratory directed by Ogata and the Kitasato Research Institute competed with each other in the field of bacteriological research. Dr. Kiyoshi Shiga, who studied under Kitasato, won international fame in dysentery bacillus research. Born in 1870, Shiga was only 27 in 1897 when he announced the discovery of the dysentery bacillus, but the medical world of his day would not acknowledge his discovery. In 1900, Dr. Kruse of Germany detected a bacillus which closely resembled the Shiga bacillus from a patient suffering from dysentery. The only difference appeared to be whether or not it engaged in peculiar exercise.

In the following year, Shiga went to Germany where he held a debate where

about the same time.

In 1868, a new Japan was inaugurated under a political system of imperial rule. In determining the future medical system of Japan, the new government in 1870 decided to follow the German system. The government had earlier employed the services of an Englishman, William Willis, who had rendered valuable assistance to the Meiji Government. The government was also aware of the meritorious activities of Dr. James Curtis Hepburn in Yokohama and other American Protestant missionary doctors. Thus, the German system was selected after carefully considering the other systems of Western countries.

Until the year 1890, medical education in Japan was chiefly in the hands of instructors invited from Germany. But with the return to Japan of medical students who had studied abroad, medicine in Japan assumed a new form, centering around the foreign trained Japanese doctors.

In reviewing the achievements of medical research by Japanese doctors for nearly 50 years between the end of the 19th Century and the beginning of the 20th Century, their successes in the fields of bacteriology, immunology, parasitology, pharmacology, anatomy, and pathology have been noteworthy. These Japanese doctors, most of whom had studied in Germany and the United States, also took the initiative in conducting research into sero-therapy, chemo-therapy, hormones and vitamins. We shall now present a few notable examples.

The first bacteriologist in Japan was Masanori Ogata. Establishing the first Department of Hygiene at Tokyo University in 1885, he became its first professor. Although at the time bacteriology was not an independent subject, Dr. Ogata carried out bacteriological research. Although in 1885 he had reported the discovery of a virus from the blood of a patient suffering from Beriberi, an endemic disease of Japan, this was an operational miscalculation. Later in 1890, he was highly successful in preventing and treating anthrax, a dreaded communicable disease found in livestock.

By extracting blood from livestock that had a natural immunity to anthrax germs, Dr. Ogata was able to treat livestock suffering from anthrax with this blood. At the same time, by injecting this blood into livestock that were not affected by the disease, he was able to build up resistance

# The Past 100 Years, A Century of Japanese Medicine.

ISHIHARA Akira

Institute of the Medical History,  
Yokohama Municipal University  
School of Medicine.

Modern medical science began in Japan about 100 years ago in 1857. On November 12, 1857, Dr. Pompe van Meerdervoort who been invited by the Japanese Government began teaching medicine in Nagasaki. The 28 year old doctor, educated at the Dutch Medical School, was instructed to teach everything that he knew about medical science to the young Japanese students who, for their part, resisted the doctor's earnest efforts. The main reason for this attitude stemmed from the fact that they had no understanding at all of the importance of science.

Medical practice in those days had been deeply indebted in Chinese, based on the methodology of natural philosophy which had been introduced into Japan some 1300 years ago. The doctors were, therefore, unprepared to accept the new approach of scientific method. However, the learning of Western medicine, began in the middle of the 17th Century, [received a tremendous impetus with the arrival of Dr. Pompe. Never before nor since has there been a doctor who has lectured on all phases of medical science.

During his short stay of five years, the young doctor expended every ounce of his youthful energy towards establishing the basis of Western medicine in Japan. In 1860 the first foreign-style hospital of 120 beds was set up in Japan, a forerunner of the present Medical Department of Nagasaki University.

Somewhat earlier in Yedo, in 1858, 82 private medical practitioners united to organize medical facilities to popularize vaccination. This, in turn, became the forerunner of the Medical Department of Tokyo University. The remarkable developments in Japanese medical science which later followed owe a great deal to the medical schools established in Nagasaki and Yedo at

●富士川 游先生  
生誕100年記念出版

# 日本医学史綱要

富士川游先生の日本医学史における功績はまことに偉大にして不朽である。ことし昭和40年は先生が慶応元年(1685年)広島県に誕生されてから正に100年にあたる。

富士川先生の著書としては「日本医学史」(明治37年刊)、「日本疾病史上巻」(明治45年刊)、「日本医学史綱要」(昭和8年刊)が最も重要であり、いずれも20世紀前半の日本を代表する稀代の名著で、多くの年月を経た今でも、その内容の価値は、その後に出た類書が足もとにも及ばぬくらい高い。しかしその名著も、近年は入手切望者が容易にその望みを達せられないのが実情である。

わが社はここに、日本医史学会が富士川先生生誕100年を記念して「日本医学史綱要」を複製出版するにあたり、これを世の読書士に提供するため、乞いて出版することにしたものである。

A5判 335p/¥2,000 円120

医歯薬出版株式会社

東京都文京区駒込片町32  
振替東京13816・電話東京(942)0101(代)

# NIHON ISHIGAKU ZASSHI

---

Journal of the  
Japanese Society of Medical History

---

Vol. 12. No. 1

Dec. 1965

---

## CONTENTS

### Original articles

- The influence of European Medicine  
on Japanese Surgery (2) ..... Goro Achiwa···(2)
- The transcriber of the so called. *Fukuzawa Copy* of  
"Ran gaku Kotohajime" ..... Masafumi Tomita···(55)
- The past 100. Years, A Century of  
Japanese Medicine ..... Akira Ishihara···(66)
- News** ..... (58)

---

The Japanese Society of Medical History  
c/o Department of Medical History  
Juntendo University, School of Medicine  
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo.